



和  
漢  
朗  
詠  
國  
字  
抄

五  
六





和漢朗詠集抄卷之五

雜

風

陰陽激怒の聲こゝろと土竅つちあなより出て地上ちやうじやうにを横行こゝろし  
四時の氣候しよじのきゑいと時の氣運ときのかいふらふて或ある東あづまあるひ南みなみす

春風暗剪庭前樹。夜雨偷穿石上苔。

春の風はるのかぜが暗くらに庭の樹の枝えだや梢すゝめを刀やいばで剪きつゝのへるどくは  
芽こゝろをよぐまする夜の雨人あまもくば偷ひそかに石の上の苔こけ穿うり

入松易亂。欲惱明君之魂。流水不歸。

應送列子之乘

紀綱言

風中の琴かみと云願ねがふて風の吹ふく琴の音ね交まじり聞きこはる意いの風かぜの松まつ吹ふく音ね  
ハ琴かみと聞きかぐ實まことハ風かぜもバ乱みだれ易やすク琴かみハ入いる松まつの曲まがりはる王わう明君めいくん漢帝かんてい  
の諱なづの字なづは避よ後昭君こうしやうくんす句く奴やつ知しんん昭君しやうくんを胡國ここくへ嫁よめむ其道そのみち  
すぐ琵琶びばを調しらへ心を慰なぐさめ今松風いままつかぜの琴かみの乱みだるハかの琵琶びばと合あ

雜

春の風暗に庭前樹を剪。夜雨の  
雨の偷に石上の苔を穿

入松易亂。明君之魂。流水不歸。應送列子之乘



漢主の手中に吹  
て駐不徐君の塚  
上の扇て猶懸り

班姫扇を裁して  
誇尚す應列子車  
を懸て往還せ不

女は魂を懸んとて琴の流水の曲あり又車の若く流水の漢書に  
出列子若く御辰風を乗れ吹きて空中を行く人今流水の曲は  
去る風のしるしを云とて流水の車歸絲を  
列子が乗を送りて作りし列子道學一家を成り

漢主手中に吹不駐徐君塚上扇猶懸

北風利し劍の如しと云題へ漢主高祖三尺の劍を提て天下

賢者之王の使して魯に行道徐君の国の君が宿りし季札の佩る劍  
去歸る徐の君率も悲墓に至塚の松に劍を懸て去ると史記  
小出されば季札の劍猶今も風の扇に似ると云て北風劍のたを云

班姫裁扇應誇尚列子懸車不往還

清風何の處か隠ると云題を作班婕妤團雪の扇を作持て  
炎天風を裁り誇り自ら吾を尚と裁の素の絹を裁扇の制と云り  
班姫女と云ふ同納涼の詩扇の詩に列子の詩の出し記七十一へ車  
を懸と云ふは仕を止車を揚りて乗ありと云を云る風の止る意

秋風の吹かすもてとぬれ秋乃葉のさばは

戀人のもてくはる心の秋風を恨むむ折と秋の葉の音  
秋風の吹かすもてとぬれ秋乃葉のさばは

あつと残りける有明の月影に山嵐に散るもその影はうらやま前白  
さゆこの歌三十四字ありども耳にいさすと云り

雲

陰陽の氣聚ると山の草木水氣を吸とて大陽小蒸升  
はれ雲となり風に散るあまの氣濃ると雨と云り降る

竹班湘浦雲凝鼓瑟之跡鳳去秦臺

月老吹簫之地

愁の賦へ楚帝の女娥皇女英二人との舜帝の后なる舜の崩るは  
を悲と湘浦の岸に立て泣る涙竹にしみ班に染りて後生出る竹  
を班の后心を慰めんも瑟の音を鼓むひと后かくれぬ湘浦に蒸れり  
瑟城まじり跡は雲凝れば人かかへる小哀なるぞ秦の穆公の女

雲  
竹湘浦の班にして  
雲鼓瑟之跡凝  
鳳秦臺去て月  
吹簫之地小老

上作

張讀



山遠して雲行客  
の跡を埋松寒て  
風旅人の夢破

盡日雲を望み心  
繫不時有て月夜  
見を夜方に開

漢皓秦を避之朝  
望孤峯之月陶朱  
礙陶朱越を辭す  
暮眼五湖之  
煙小混す

吟王を蕭史の妻す夫婦よく蕭を吹て鳳の鳴びます数年の後鳳その  
屋にさるる二人のさるるを建鳳臺と云後仙とる鳳小乗て去と列仙  
傳小出今鳳去てあとのれく蕭を吹て跡は唯月のさるる  
住て久しくくちをば老るるとい意上の句は同一

山遠雲埋行客跡松寒風破旅人夢

愁の賦く遠山の雲くれば行客の跡を埋  
松風寒て旅人の夢破むすび得ざる

盡日望雲心不繫有時見月夜方閑

盡日終日朝より夕まで雲を望み心わくがもして浮立を繫あるる  
時ありて月を望み夜に開物哀此詩聞て幽栖と云願て独住の意

漢皓避秦之朝望礙孤峯之月陶朱

辭越之暮眼混五湖之煙

賢人の隱る其上に雲くれば其氣をのどと隠士あるを題する賦  
漢の代に東袁公綺里季夏黃公角里先生四人の賢人老て首皓

暫崎嶇借

石を戴非空峻  
峻を偷とも豈松  
を生とんや

漢帝の龍顏  
處小迷淮王の雞  
翅失雷連

明永國

暫借崎嶇非戴石空偷峻峻豈生松

淵明が四時の詩小夏雲多奇峯と云句を題して夏の雲立都在中  
升るる奇峯の聳るるに似る暫借崎嶇を借とも實に石を戴

山はあわく空く峻峻を偷くれば松の生とん

まての山はあわく空く峻峻を偷くれば松の生とん

漢帝龍顏迷所處淮王雞翅失雷連

漢帝龍顏迷所處淮王雞翅失雷連



翅ハ雷連を失ん

晴

天無片雲と云願て秋の天晴一序の雲もあらず漢帝高祖以言  
御父太公御母劉媪太澤の堤に昼寝をり空俄々雲雷電也  
太公往てん龍降て嫁り子を其面龍のけりたあり高祖  
とて嘉高髣髴髪うしく丸の股に七上の黒子あり各邦定ま秦の  
都の巽小住る秦の始皇東南の天子の氣立のちと聞尋秘殺也  
と有也芒碭山かきり其居あ上かつの五色の雲立をりあてに  
妻の呂后を尋行へ始皇崩るれく天下を承る位に高祖と  
云是く史漢小本帝王に龍顔と称するに始る今いふ心空晴雲  
をかんれ漢の高祖の處多所あるを尋迷る所は虚字也  
かて居と云我淮南王劉安仙道を得り小薬を攜り白の庭に有  
る雞犬かかかて飛り行を得て犬は天に吠雞は空に鳴といふ  
空晴て雲のせんかの雞の翅を連り雷るとを失くといふ  
新古今  
よそこのらんやをかんづるたまひのまのを雲  
戀の哥へ思ふ人城峯の白雲かきりてまう  
葛城高天とくに大和国の名所なり

晴 晴天より雨あつて新  
はうハ霽の字といふ

煙消して門外青山近露重して窓前緑竹低

煙消門外青山近露重窓前緑竹低

紫蓋之嶺嵐疎

紫蓋之嶺嵐疎雲收七百里之外瀑

布之泉波冷月澄四十尺之餘

布之泉波冷月澄四十尺之餘

雲碧落天層解風清漪

雲消碧落天層解風動清漪水面皺

を動して水面皺

明永國字少

卷之五

惟

四

都良香



雙鶴出阜披霧舞孤帆連水與雲消

嵩歸鶴舞日高見涓龍昇雲殘不

雙鶴出阜披霧舞孤帆連水與雲消  
空晴る我飲び雙の鶴が阜出雲を披て高く舞蓬の沖舟一營品  
 入るを孤帆と云ぞ孤帆入海を行くは遠く幽るり雲消る

歸嵩鶴舞日高見飲涓龍昇雲不殘  
晴後山川清と云題して上の句山下川を云り鼻小居る鶴  
 晴を美しく嵩山に歸るの舞日も高て見ゆ晴るるをいそ日高  
 て作周の天王の太子王子晋笙を好伊洛の水辺に遊び鳳鳴の曲を吹  
 道士浮丘公とてひ嵩山に召さるる二十餘年終に仙道を得て鶴駕  
 かの山より候氏山に往來ると云故事を云り胡国より漢に入る黄河と  
 云り涓涓と流る清涓涓濁り原に黄河水より黄なるもの  
 名秦の文公の時終南山より黒龍出て涓水を飲と史記ありかの龍昇  
 て雲残ぬ川の晴るるを作さる句と歸嵩飲涓音小いひ説長れ客  
 原本  
 作者  
 名欠

春の麗るる空に有る無るもさうて糸けり又ハ馬のそりあがる  
 小を似るるものあり莊子に野馬の遊糸といひ遊これ春の詩の叙

曉 夜曙て日輪の昇 ぐる程を云晨

佳人盡飾於晨粧魏宮鐘動遊子猶殘月於行函谷合鷄鳴

佳人盡飾於晨粧魏宮鐘動遊子猶  
 行於殘月函谷鷄鳴  
賈島

曉の賦より魏王の宮中三千の美人佳人晨の化粧も曉の鐘  
 動響遊子諸侯の国々遊ぶ士の旅人の残月を行く鷄鳴て朝告  
 る秦の昭王の時齊より孟嘗君質を來居る此人の藝ある養ふ  
 客の門下の客三千人か及りある人秦は虎狼の国と云ふと云い  
 客の中の狗のものを得るもの存る昭王の狐白の裘を盗せ童僮の美  
 人あり昭王のいと申させ夜中都城出逃去に函谷関のうら夜  
 深く通る客の中に雞のものを得るもの樹の上り鳴る關路の鷄  
 それ鳴つてす夜明とてしけり孟嘗君関を越道歸ると史記  
 あり是の事なり和歌み

幾行南去之雁一片西傾之

幾行南去之雁一片西傾之月赴征



月征路に赴獨行之子。旅店猶扁。泣孤城。百戰之師。胡笳未歇。

嚴粧金屋之中。青蛾正畫罷。宴瓊筵之上。紅燭空餘。

五聲の宮漏初明。後一點の窓燈滅。と欲時。

但雙松の砌下に。當有更に一事の。心中に到無。

青山の雪有て松の性を諳。碧落

明永國字少

路獨行之子。旅店猶扁。泣孤城。百戰之師。胡笳未歇。謝觀

曉の賦へ南渡來る雁の聲々幾行か飛つる空ま西傾在明の月が只一片ある追討使の命を蒙り征伐の路に赴き衆かち獨行の男子旅店小宿せる扉をまもり明も曉も猶扁り胡を防ぐ孤城に在る萬里都を思て泣出て百戰百勝の軍兵や衆師の目も胡の笳

嚴粧金屋之中。青蛾正畫罷。宴瓊筵之上。紅燭空餘。同

上小同下賊入金屋ハ后の宮ノ瀨の武帝幼少に阿喬と云美女をえんひ彼を得バ金屋を造て置一と云き一嚴に粧する金の屋後宮の華麗りる中の美女もちが曉化粧青蛾と畫夜の酒宴の罷る瓊の筵ハ紅燭空餘も曉のさる一説に嚴粧ハ美人粧也

五聲宮漏初明後。一點窓燈欲滅時。

禁中に侍夜此詩を作元九贈一宮中小漏刻に置て時を計る一夜を五ツに分ち初更より五更の五聲ハ五更初て明るハ曉ノ窓ノうづくる一點の燈滅んとする曉方のさるぞ

後撰 わつらものさしほしそをまはらひてさひさるるを 白露ハちかてといはん枕詞

松

但有雙松當砌下。更無一事到心中。

白氏新昌の開居の庭に松を雙植れ砌下當と云家に近と云意白世を道いハ世の中の事一ツも心に到とさるるや

青山有雪諳松性。碧落無雲稱鶴心。

卷之五

佳

六



小雲無く鶴の心  
小稱り

琴高曲を改煙  
吹て後蕭瑟心  
催雨を學辰

千丈雪を凌て  
康之姿の喻應百  
歩風の亂誰養  
由之射を破ん

九夏三伏之暑月  
竹錯午之風  
を會玄冬素雪之  
寒朝松君子  
之徳を彰

十八公の榮ハ霜  
の後小露一千年の  
色ハ雪の中ハ深

青山ハ松山の色雪降時こそ松の性寒犯れず貞木と諳許  
小知らず諸樹花咲みどり時ハ松の操もあをれぬ世乱きて賢  
人のあつそるゆとて碧落の雲なく鶴  
晴天をうらこぶを心いりるものと作り

琴高改曲吹煙後蕭瑟催心學雨辰

松風の秋の韻あをを題の商秋の吐音松風を琴比松を  
煙と常盤の松の声も秋風吹尋常の響音に意て  
曲改と云く蕭瑟も風の鼓の器に比し雨を學ハ松の  
音雨似松の秋風に雨の音あつて秋の心を催す

千丈凌雪應喻嵒康之姿百歩亂風

誰破養由之射  
柳化して松と爲賦千歳を經柳變松と云あり  
千丈の松雪を凌寒犯緑の晋の嵒康字叔夜賢の威儀  
嚴然と形容さ孤松の独立と云  
ると晋書に出る彼姿の喻と楚の養由基弓の名人

九夏三伏之暑月竹含錯午之風玄  
冬素雪之寒朝松彰君子之徳  
河原院の賦之賦の大臣の白宅と奥州鹽竈の浦の景ら面拍前  
るのありを述す夏三月と九日此九旬を九夏と云二伏ハ涼  
の詩小秋あり錯の午ハ南方夏ハ涼ハ風火氣小錯心  
錯午の風と云錯をあやまると訓風夏を犯ハあやらしし  
夏の暑ハ竹にす風を含玄ハ黒之北方の色冬に配素ハ白  
君子有徳賢者を云世の濁ハ汚れず松の雪霜小犯れずかれより

十八公榮霜後露一千年色雪中深

歳寒ハ松の貞を知題之丁固と云人腹の上に松生ると夢順  
んて松ハ十八公と書る十八歳ハ公と云詞のでん  
しと會録出松を十八公と云こ始る松の榮ハ霜降後  
露ハ松の齡一千年とす常盤の色雪のうちハ深

月永國語



雨を合嶺松天更に霽る秋燒林葉火還寒

合雨嶺松天更霽燒秋林葉火還寒

嶺の松風雨の音に似る合嶺云實の雨を天霽てある後江相公林の紅葉其色火の如く秋燒と思ふ實の火は秋の晩も還て寒に火を

とたわいことい四季にゆるぬ松の色もさす春は毎年

我んてもえくもぬらるるの松いくもぬん 後人

住吉所明神攝津國之姫松の松の松を向て問ふことぞ此歌伊勢物語より在五中將のよめるなり

あまのこゝろのわいしを思はむしほるを松

あつらふ地祇と云又住吉伊勢諸尊日向の小戸の橋の檉原に御被しるる時潮に現るる御神の後小神功皇后神勅によりて攝州にむかひるるされも此神此國に跡ももる天降現人神とよめるともり相生の神木の松はよめるなり

竹

煙葉蒙籠侵夜色風枝蕭颯欲秋聲

涼州の令狐相公竹を愛せり詩を樂天に贈る和韻竹の葉の緑白煙に似るる茂く蒙籠夜の如きも侵し晝より夜に似る意竹の枝風

聲と思ふ

阮籍嘯場人歩月子猷看處鳥栖煙

晋の代か七人の賢人竹林に住琴を彈詩を作酒を飲て樂する阮籍字嗣宗其一人之竹林に月城を歩むるを人

月に歩と云へ肩はもて吹を嘯と云晋の王羲之が子王徽之字子猷竹を愛せり竹葉青く茂る煙にんが雀かとの遊ぶるを煙に栖

と作し竹に栖小鳥は逍遙の友とせりとわり此句竹枝詞よりかく作るなり

晋騎兵參軍王子猷裁稱此君唐太

煙葉蒙籠侵夜色風枝蕭颯欲秋聲

阮籍嘯場人歩月子猷看處鳥栖煙

晋騎兵參軍王子猷裁稱此君唐太



種一唐の天子賓客白樂天ハ愛て吾友と爲

子賓客白樂天愛爲吾友

篤茂

脩竹が冬も青てあるを頌ゆる序晋の世に騎兵參軍と云官ありし王子猷竹を愛し此君と稱し今竹の異名と爲る唐の代太子賓客として春宮に學問を教ふる司馬姓白泰の自名居易字ハ樂天北の窓に植て竹を友とせしと白氏文集に云く

迸筍未抽鳴鳳管盤根纒點卧龍文

迸筍未鳴鳳乃管抽未盤根纒點卧龍の文を

筍の數多芽抽出せし水の迸りたる短く笛やと云前中書王抽出ぬ黃帝の臣伶倫氏崑崙山の竹枝管は作鳳凰の鳴也字は笙

世の中経て行くものいひなき鸞のこゝ我音にるたぢん

世のふとばてのふとばる吳竹のむせ世のふとばるふとばる

時雨小草木色うらるものけるは竹のこゝは時雨の音をうせくても翠の色はかろぬ竹の操を感ぜし古文六帖に志れまるとのり

草

沙頭雨染班班草水面風馳瑟瑟波

沙頭に草の萌出するが春雨に班々青く水面に風馳波が打つる瑟瑟ハ波の聲

西施顔色今何在應在春風百草頭

西施を伐て王城橋を越えし西施と云美女を賂て王を救ひ元稹

竟に吳王城亡す越王又西施を愛するが范蠡諫て五湖に去る時彼を水に沈め失ひたり其顔今何在と尋るは春風百草吹くは子處を在ると古盛なり吳越の王も亡び愛せ美人の傳はるこ

眉を擡ぐるふゆいゆ増ありをも醜女も身を受ふいゆ醜くことあり

瓢簞屢空草顔淵之巷の滋藜藿

瓢簞屢空草滋顔淵之巷藜藿深鎖



良言國三抄  
深鎖雨原憲之  
樞を濕

### 雨濕原憲之樞

直幹

申文の句へ駮かりては、蕭竹の器のりて飲食をせむとこれ食を  
屢空にしてある顔回字子淵れ子の弟子とて聖に亞大徳なるもま  
一筆の食一瓢の飲して陋巷に在る道に樂れ孔子も美の門人  
ま草滋る意は作てり藜藿はあき鎖を凌て路を塞ぐ孔子の弟子原  
思字憲來の扉蓬の戸上ハ雨をまり下ハ露沾ひ食をせむとこれ  
を彈て樂賢者草の樞に雨濕心細く躰を以て民部大輔直幹  
我身を二賢者にそて書る民部民の司天下の戸口司の重  
職をま望申て書へ文も美く道風清書る魚天晉帝秘藏

### 草色雪晴 初布護鳥聲露暖 漸綿蠻

春日の山居を作りて雪が晴て草が萌布護鳥の囀  
露暖小ゆるまに漸にゆるむ詩に綿蠻鳥の聲といふ  
後江相公

### 華山有馬蹄猶露傳野無人路漸滋

山海經に大華山高千仞廣百里とて周の武王の紂王を廢  
亡馬を華山に放牛桃林に繫せ治て兵車馬を用するを示す

華山に馬有て蹄  
猶露傳野無人無  
路漸滋

尚書にある本文は「草が若たぬ蹄をくねる般の高宗武丁御  
父の喪に三年言すとて政もゆるむ賢臣を得て攝政せしめし  
を布あある夜夢に相成得とて人の其貌を画し尋求しついで傳  
野の岩窟小住る翁を得來る果して賢者我れを渉るはを船楫  
とせん義和はを監梅とせんといふ傳野に得て説の傳説と  
なる此人出去ると餘に人跡なく路小草も漸滋る

かのをらにゆるむのこまかろとわろとも君がらぬん  
人元

旋頭哥上の句五七七下の句五七七と文字の數をあら上五文字再び  
返唱するもさばうをめぐも哥といはり波岡に草が夫子尔が  
けべうげ其まわしめ君が來ん時の御妹かせんといふまか  
さうふと云とくりそハ制す詞まかハ馬の飼草なり

ちわあさの森の下若らひぬまぶ約ますらびるくは  
言さ

古今小みみあさ大荒木の林ハ山城此五文字あはさむと云  
草老ぬまハ駒も愛せば人ハもと人の老を思ひ捨るはせん不愛人  
やぶすともまはらんまを同神をくまの目にはせんらん  
新古今 忠見



野を焼く草薙出るる日と火を燃る萌とを云けり春の日に  
とらば其名の通るは日に任せけり上なるん治定するん下知らり

鶴

嫌きらしく小人せうじんか而しかて  
高位こうゐを踐ふみは鶴つる

嫌きらしく小人せうじん而しかて高位こうゐを踐ふみは鶴つる有あり軒のり惡にく利り口くち

之覆おほ邦家ほうか雀能すずめ穿屋くわんご

賈鳥

軒のり東有あ惡にくく  
利り口くち之の邦家ほうかを  
覆おほは雀能すずめ屋を穿く

諸鳥を臣と鳳を王とする賊小人の愚る者を云帝主の臣下ハ  
おるは身少て位不在は嫌ふ衛の懿公鶴城奪て大夫の位をひ  
軒に乗て棋に行ふ國人誘心をさし攻へる時鶴に防し  
めと云て扶す公を殺し其肉を食ひ肝をくろ残し去り弘監と  
云臣其肝を取已が腹をばは長はちら死しと史記に出鶴は愛  
國城亡り戦刺禁心鳳城王とする頭をさく口利が善者城議  
記高位に経昇て終るハ君は誑邦家城覆は悪ると論語の文之  
雀が屋を穿損ハ利口の邦家城覆は同ト毛詩の句は取し

李陵之胡りりやうのこ入いり  
同どう但た異類いれいは見みる

同どう李陵りりやう之の胡こ入いり但た見み異類いれい似に屈原こくわん之の

在あ楚そ衆人しゆじん皆みな醉すい

皇甫曾

屈原之楚こくわんのそ是在こゝに  
似に似に衆人しゆじん皆みな醉すい

群ぐん雞けいの中のに鶴かくの只ただ一ひと羽う下くだる意いの賊そくハ李陵りりやう字あや少卿せうけい漢わんの武  
帝ていの時とき大將軍だいしやうじんとて匈奴こつこと戦たたかひ降くだる其その胡國ここくに入いる時ときに  
その皆類みないれいを異ことハ李陵りりやう一人ひとりの都人とじんと鶴かくハ壁楚へきその屈原こくわん湘江じやうきやう  
の漁父りよふに對たいハ衆人しゆじん皆みな醉すい我われ独醒ひとりさめと云い衆人しゆじんを雞けいに比ひす屈原こくわんと紅  
葉こうえつの詩しを

聲こゑ來き枕上まくらの上千せん年ねん鶴かく影かげ落お落お盃中はいちゆう五ご老らう峯ほう

聲こゑ枕上まくらの上來き千せん年ねんの鶴かく影かげ盃中はいちゆう  
五ご老らう峯ほうの落お

春の部躑躅の詩に晚葉尚開と云其次の句にや元氏が溪の  
家居に題せしハ峯に啼鶴の聲枕上に聞ゆる酒をくむ盃の中に  
山の影が落る廬山の峯あり四時雪消す白頭いよと  
五老峯と云此名はくわんがくはる溪の住家城称美せし

清せい喚わん數聲すうせい松しょう下か鶴かく寒かん光こう一いつ點てん竹ちく間ま燈とう

清せい喚わん數聲すうせい松しょう下かの鶴かく寒かん光こう一いつ點てん竹ちく間まの燈とう

松樹の下に喚鶴の聲は清て聞ゆる竹を植て窓の小燈ハ  
光し寒く寂しはるる是は在家の出家と云題して俗僧の境思  
雙舞さうぶ庭前ていぜん花はな落處らくちよ數聲すうせい池上ちじやう月げつ明めい時とき

雙舞さうぶ庭前ていぜん花はなの



落處數聲池  
上月の明る時

鶴舊里に歸  
今威之詞聽可

龍新儀を迎陶  
安公之駕眼在

饑脆性躁  
公念じて乳老  
鶴心開かて緩  
緩とて眼

漢に叫で遙小孤  
枕の夢我驚し  
風に和て漫五  
絃の弾小入

池上月の明る時数聲啼とつ意なり  
樂天の鶴贈詩や庭前花の落るところに二羽雙舞

鶴歸舊里。丁令威之詞可聽。龍迎新

儀陶安公之駕在眼。都良香

神仙の願して作策の文晋の哀帝の時丁令威仙遊山入て  
歸す十歳経て白鶴とつて舊里の花表に啼我こそ丁令威  
火散と云霜の詩に冬部六安郡の陶安公比る朝  
まほ久く天赤龍降七月七日は伊予と竟に安公天上  
るるに仙傳出され今威詞も聽く安公駕眼前小あそと神  
仙偽談と云  
べぐべとの意

饑脆性躁公念乳老鶴心開緩緩眠

此意山に題する體性躁は饑脆は食やて念は乳  
鶴の性開けるが老ればいふと緩々小眠乳はまのこつゝ

叫漢遙驚孤枕夢和風漫入五絃彈

霜の降天の鶴聲の啼又霜はいと甚だ順  
かも啼漢天漢の空の意に用ひ孤寢の枕鶴の聲小夢我驚す  
又風に和て漫の五絃の琴は弾曲小入  
此詩は霜夜小鶴の聲は聞題る

和歌浦に紀伊国海半無ハ潮もろ無々又一説は去るわが  
方半無ら方ともわ鶴のつらも潮のてるは芦邊水の遠若直

五条内侍のうこれ賀に大虚く空の下群居ハ飛つをたれり  
これハ助字ともう内侍のう千年のよさいるんは成りあらん  
鶴の心哉我こそ風に  
やいふとてをらん

おまら風まゐるの浦はるきこのかぎりも井はくしんは  
新古今



猿

瑤臺霜滿一聲之玄鶴天小喚巴峽秋深五夜之哀猿月叫

江巴峽從初字成猿是巫陽過始腸

三聲猿後垂一葉舟中病身載

胡雁一聲秋商客之夢破巴猿三叫曉行人之裳

猿

瑤臺霜滿。一聲之玄鶴喚天。巴峽秋深。五夜之哀猿叫月。

江從巴峽初成字。猿過巫陽始斷腸。

三聲猿後垂一葉舟中載病身。

胡雁一聲秋。破商客之夢。巴猿三叫。曉露行人之裳。

胡雁一聲秋。破商客之夢。巴猿三叫。曉露行人之裳。

天津風。空に吹風吹飯前。和泉國の名所。雲井。大内。かたて。清正六位藏人。かて天子の御前。近くも。奈り。に極。賤。巡。遊。とて。五位に。叙。せ。り。て。て。て。從。五位下。紀伊守。か。り。る。藏人。を。や。め。地下。に。く。る。る。り。還。昇。の。志。あ。る。ゆ。身。は。田。鶴。に。く。く。か。ら。う。又。雲。の上。に。昇。殿。せ。り。め。と。

清。と。云。賦。入。瑤。の。臺。に。霜。滿。て。老。る。玄。鶴。一。聲。天。に。喚。く。山。と。山。の。間。を。峽。と。云。三。峽。山。と。て。三。つ。の。峽。ら。ら。る。間。水。の。流。は。回。る。こ。の。巴。の。い。は。れ。ゆ。巴。峽。に。猿。多。く。任。国。に。入。る。酒。飲。め。て。送。る。人。と。別。を。ち。む。小。曉。近。た。五。更。の。比。其。地。景。の。清。と。は。月。か。叫。猿。の。色。夜。

蕭。處。士。と。云。入。黔。南。と。云。丸。行。送。る。詩。か。て。秋。の。部。月。の。詩。か。百。不。醉。黔。中。と。云。前。の。句。は。江。の。流。三。峽。に。入。て。巴。の。字。成。書。る。と。云。巴。峽。に。至。る。猿。の。叫。は。前。の。詩。か。出。る。か。腸。も。断。る。思。う。初。て。と。此。景。の。面。白。を。こ。つ。け。る。當。意。始。て。の。字。ハ。唯。今。の。哀。情。切。ら。る。ゆ。二。義。あり。

田。之。巫。陽。も。同。づ。こ。の。山。か。て。其。を。過。る。巴。峽。に。至。る。猿。の。叫。は。前。の。詩。か。出。る。か。腸。も。断。る。思。う。初。て。と。此。景。の。面。白。を。こ。つ。け。る。當。意。始。て。の。字。ハ。唯。今。の。哀。情。切。ら。る。ゆ。二。義。あり。

樂。天。江。易。司。馬。に。左。遷。せ。り。舟。路。か。て。妻。女。へ。贈。り。詩。や。宣。都。山。川。記。に。三。峽。の。猿。の。聲。の。哀。と。三。聲。に。至。り。巴。間。者。淚。を。流。さ。る。は。か。ら。し。と。あ。る。と。云。故。郷。を。戀。る。淚。が。垂。黃。帝。の。時。木。の。葉。乃。水。に。浮。ぶ。理。ふ。と。て。舟。を。造。る。り。一。葉。と。云。又。一。艘。の。舟。と。云。義。か。も。通。ず。病。身。と。ハ。自。己。の。あ。り。さ。ぬ。を。云。へ。り。

胡。雁。の。雁。が。秋。都。來。る。と。て。五。湖。の。水。上。を。飛。過。る。舟。か。海。に。送。せ。商。客。が。一。聲。に。夢。を。破。猿。の。叫。は。前。三。章。の。叙。く。と。裳。ハ。夜。裳。ハ。



人煙一種秋村僻  
猿叫三聲曉峽深

曉峽蘿深猿一叫  
暮林花落鳥先啼

谷靜終聞山鳥語  
梯危斜踏峽猿聲

管絃

付舞妓

一聲鳳管秋  
秦嶺之雲驚  
數拍霓裳曉  
候山之月送

第一第二の絃  
索索秋風

月永國三少

人煙一種秋村僻。猿叫三聲曉峽深。

曉峽蘿深猿一叫。暮林花落鳥先啼。

谷靜終聞山鳥語。梯危斜踏峽猿聲。

山寺の僧の里小出て山中歸城送幽谷住問人さく  
鳥の音浅友とするの深山の谷より谷へさる梯斜て危く山の間に  
猿のなくハ声浅踏て  
行心地さう

古亭  
こひらにまらからたどる感れ山のひあるらるるはらぬ  
こびらに倅くはら申んか助字りてさくか峽と申非と  
兼て色寛平法皇傳西川に記さるる日御遊の時猿山のひ小叫と

り小題のありさる法皇の御幸をさる山のうひあふて日小てはるれくと  
らみより足曳ハ前かもし山といえん枕詞高に足をひさ歩むとらへ

管絃 付舞妓

文選の註に吹を管といハ撫する絃と云笙感管葉  
吹て管を管と琴瑟琵琶等の類ハ絃ハ舞妓まひあ

一聲鳳管秋驚秦嶺之雲數拍霓裳

曉送候山之月

建昌宮のありさる城賦せり鳳管ハ蕭ハ昔黃帝伶倫として崑  
崙山の竹伐さしめ鳳凰の啼を學ぶが蕭とて起る秦國の雲ふら

嶺まよもの宮の歌舞の聞ゆる數の拍子ゆて曲を奏候山の  
月更ら曉ゆ舞ハ傾く月城送る意ハ葉法善唐の玄宗を詠  
月宮に至樂志城聞よりて霓裳羽衣の曲を作さしめり候氏山  
と云ハ王子晋仙道を得て去て此山に來蕭吹とあるハ因り詩ハ

第一第二の絃索索秋風拂松疎韻落

卷之五

佳

古

三



松を拂て疎韻  
落第三第四  
の絃は冷冷  
夜鶴子を憶て  
籠中に鳴

隨分の管絃は  
還て自足等閑  
の篇詠人不知  
被

頓令燈下裁衣婦誤剪同心一片の花を  
剪令

羅綺之重衣爲  
情無機婦因  
妬管絃之長曲  
小在關不を伶  
人於怒

落梅曲舊て脣  
雪を吹折柳聲  
新として手煙  
掬す

第三第四絃冷冷夜鶴憶子籠中鳴  
第五絃聲尤掩抑瀧水凍咽流不得

樂府の五絃彈の文孔子家語に舞五絃の琴を製轅風の  
詩を讀ふと長三尺六寸四分年の日數三百六十四日を象り  
五の絃は木火土金水の五行表し、素琴は、みどり、秋風の  
松を拂ふ聲に似て、意を疎韻落とす、冷は、すさめ、秋風の  
夜鶴子、思ふ、籠中に鳴、物長、色、別鶴曲、鶴曲、杯  
ある、うら、掩抑、滯ると、瀧の水、凍、咽、心、流、らる

隨分管絃還自足等閑篇詠被人知

衆と樂する、わ、わ、後、も、我、分、隨、管、絃、還、自、足、満、一、足、す、と、云、心、等、閑、氣、常、口、号、に、詩、文、篇、詠、人、に、知、ら、れ、や  
頓令燈下裁衣婦誤剪同心一片の花

夜笛を聞頭、苗の落梅の曲、あ、燈の下、衣を裁、  
婦の苗の心が、綴り、一片の花、文、を、と、ら、う、と、剪、誤、る、曲、と、同、心、と、や  
羅綺之爲重衣、妬無情於機婦管絃

之在長曲、怒不關於伶人

春娃無氣力、云、春の娃、女、あ、ま、ま、の、氣、か、も、り、た、意、を、内、意、を、  
作、ま、る、序、に、此、美、女、の、羅、綺、も、重、衣、と、思、う、ら、う、か、ど、機、婦、の、  
情、を、く、も、か、重、し、く、な、し、出、せ、し、如、一、管、絃、の、曲、が、長、く、れ、舞、  
小、氣、か、る、に、わ、ど、の、音、樂、の、關、を、伶、人、に、怒、る、關、本、に、關、又、關、は、  
落梅曲舊脣吹雪折柳聲新手掬煙

上の句、管下の句、絃、の、苗、の、落、梅、の、曲、あ、ま、梅、の、花、の、雪、  
小、似、る、意、と、か、の、曲、を、吹、ハ、雪、吹、か、て、あ、る、と、之、琴、に、折、柳、の、曲、  
を、柳、の、色、翠、な、煙、の、似、る、心、と、か、の、曲、を、  
彈、む、ハ、煙、を、掬、る、か、て、あ、る

相如昔挑文君得莫使簾中子細聽



相如ハ昔文君を  
挑で得る。簾中  
を使者細か徳運  
と莫

文詞  
付遺文  
沈辭佛悅  
遊魚の釣を銜

而重淵之底  
り出若浮藻  
聯翩若翰鳥  
の繳纒而曾  
雲之峻若陸

遺文三十軸  
軸金玉の聲  
龍門原上乃土  
骨を埋も名  
埋不

明詠國字抄

姓司馬名相如字長卿蜀の成都の人  
賢才あり琴をこく彈せり蜀郡卓王孫の女に文君と云ゆ  
相如の宅の簾外に琴を彈せりを聴て思ひにきく  
後夜ふまごころ一人去り前漢書相如が列傳に以琴心挑之師  
古が註に心挑琴聲に寄て挑動すと思ふ心を琴の音にきく女の  
心挑動すを挑と云されバ詩の意文君深閨に育まを相如と云す  
得るは徳のありきと云ふことなり  
婦女子細聴しむるかき琴を彈ぶるを听題とや

指遺  
この後にはあつた風をよむるものなり  
琴の音の妙なる松風のむらも通つらん  
志屋にも木公風の響ごとく山の麓と琴の緒とをよむるなり

文詞 付遺文

古人文を作る所の詞を纂る  
遺文ハ文士過去て師に其文の遺るなり

沈辭佛悅。若遊魚銜鈎而出重淵之

底浮藻聯翩若翰鳥纒繳而墜曾雲

之峻  
陸士衡

文選の文の賦詩哥に是は作んとし思ひ付れども  
つらんとも覺ず其辞沈沈深遠之懈ハ思ていさ出ず悦ハ思て  
微來るをさし少づ一筆一づびてかくし思ふハ遊  
魚が重なる淵の底に在は取べきやうかきく釣を銜つ出  
さるるは浮藻ハ水のうら草文を藻と云ふことなり云々文之文思  
そよふに浮ち其早たと曾雲の高峻に翰鳥の聯り翩  
が繳とて矢に生絹をつけて射らと忽ち  
雲井より墜來るがごとく一辞一詞ハ作

遺文三十軸。軸。軸。金玉聲。龍門原上  
土埋骨不埋名

京兆の少尹沅居敬唐の長慶三年病に死せんとす時其子  
遺言て吾平生詩を好り白氏ハ如已る也遺文の序を作ら

卷之五

佳

七



言語巧に偷鸚

鸚の舌文章分

得る鳳凰の毛

錦帳曉開雲母

の殿白珠秋寫

水精の盤

昨日山中之木

材を已諸取

今日庭前之花

詞を人於慙

王朗八葉之孫

徐詹事之舊草

淹一時之

友范別駕之遺

文を集

一本懐るんて率樂天其序を書て此絶句を書て  
其集三十卷軸々小金玉の聲ありと賞美す龍門の原  
の上に葬るる殿土に埋もる名に世に承く聞もると孫興公  
と云人天台山の賦を作其友范榮期に語てころに是を  
地に掘り金玉の聲ありと云と云

言語巧偷鸚舌文章分得鳳凰毛

薛濤云人の文を美して詩の巧なりと鸚の言ど元稹  
文の麗ハ鳳凰小仁義礼智信の文ありて五色の彩美にを得る

錦帳曉開雲母殿白珠秋寫水精盤

韓侍郎が詩を美する文章の巧に王殿小錦の帳を  
さうくさう曉に開くこと文体あささう清さう秋の景色を  
時白珠を水精の盤に寫す

昨日山中之木材取諸已今日庭前

之花詞慙於人篤茂

花の類か作する詩の序に莊子小匠石と云工匠斧子と山を過る  
路の傍に櫟あり甚大木なり也斧子伐んとい匠石不材として伐ず  
梁柱にもるに板にも用るを不材と云此木不材なるあり多つて  
天年を保つ人の女あり女あり重く用らば終身を損ふとあり  
不才の言言るもた必ずさうとあり此文も序者自ら謙て身乃  
不才の言言るもた必ずさうとあり此文も序者自ら謙て身乃

王朗八葉之孫徐詹事之舊草

淹一時之友范別駕之遺文源順

樞の在列出家して尊敬と云順其遺文集其序は作れ  
も人の作其友の集してありし其例をひて書くは後漢  
書は徐詹事の作也或ハ代の末孫は王朗註は作る舊草とハ  
あつ草をいふ文と云て下書は草稿と云意は江淹は文  
通才ありて范氏の友なりが死後に其遺る文を集し  
徐と范とハ姓詹事と別駕ハ其人の官なり



陳孔璋が詞空

病を愈馬相如  
賦八只雲を凌

贈爵の新恩  
銘石に刻獲麟の

後集、世丘を知

### 陳孔璋詞空愈病馬相如賦只凌雲

中將英明の集小題せし魏の曹操の臣陳琳字孔璋  
檄文を作るときを得し軍事を傳るを檄と云南陽の張繡と云  
その謀叛を起せし孔璋に檄を作し時し曹操頭風を病れ  
るが檄を作ちるをよむ曹公の病忽ち愈るを公歡で數万匹  
の帛をよみと魏志に出司馬相如と云管絃の詩の歌に出此人  
上林の賦を作しを漢の武帝と云陵雲の勢ひありと感もよ  
此二人と云も英明の文章すこしと云比すまば

### 贈爵新恩銘刻石獲麟後集世知丘

漢安樂寺管丞相の廬して作る逝去の後贈らる  
爵を贈爵と云管原道真卿延喜の御代に右大臣に昇るに  
左大臣時平卿二十九歳の若年文章の管公の至るに  
帝をよみ諸卿すし管公を尊信す時平卿つねに定國卿管  
朝臣を語り諫るるを昌泰四年正月廿五日大宰權  
衡の詔に流され延喜三年二月廿五日五十九歳めて  
逝去ある其後雷火慶々都焼く一院正曆四年五月廿  
日九大臣を贈らると同年閏十月廿日大政大臣正一位の宣命下  
りて贈爵の文を石に刻て御廟に建らしむるを新君  
恩と作り銘と墓誌銘とて其人生る世に功あることを志  
して其廬にむむ下の句、管家統紫紫して作る詩を集め  
管家後集とて今傳たり獲麟ハ孔子の故事之魯の哀  
公の時西の狩に麒麟を得し麟ハ仁獸とて聖人の時を  
でハ出ることを孔子感して春秋を作す其文西狩獲麟と云  
一句で筆を断らるるを述べて管家後集を獲麟の後集  
と云世の人此集をえて孔子に異るぬ人を知るを云  
孔子の母顔徴在尼丘山の神に祈り孔子を生り其頃かか  
して山の形に似られば丘と名づけ字ハ仲尼と云此對句兵名  
かこごもとくと訓を石に對し爵はくゝぬらさる  
すめと訓るは麟ハ對せり

古今  
つらものるにせらるる人の工ものるに  
あはれむる人の工と云はるるて文詞の部に  
偽のちのむくも人の言葉はまを信るん



新豐の酒の色、鶉鷓盃之中に清冷く長樂の歌の聲、鳳凰管之裏に幽咽す

酒

新豐酒、色清冷、鶉鷓盃之中、長樂歌聲、幽咽、鳳凰管之裏

公乘億

晋の建威將軍

劉伯倫、酒を嗜

以世於傳唐の

太子賓客白樂

酒功の賛、作以之に繼

風小臨、杪秋の樹、酒に對す、長年人、醉負、霜葉、の如、紅、不是、春、る、不

生計拋來詩、是業、家園、忘却、酒、為、郷、と為

茶能散悶、為切淺、萱道忘憂、得力、微

明永國字抄

友人の大梁に歸を送る賦、新豐酒、多に處、史記、項羽、本紀に沛公酒を新豐の鴻門に置たり、海中に鶉鷓に似、と負あり、其背を穿て、盃を鶉鷓盃と云、清冷ハ、さ、かり、高祖本紀、長樂宮の酒宴、と歌を發すとあり、鳳凰管、ハ、笛、之、前の管、の首章、小、新、す、幽、咽、ハ、む、せ、む、せ、の、歌、の、色、樂、の、曲、に、む、せ、む、せ、り、清、冷、ハ、あ、ら、ひ、冷、々、と、云、冷、の、字、平、聲、ナ、リ

晋建威將軍劉伯倫嗜酒作酒德頌傳以於世唐太子賓客白樂天亦嗜酒作酒功賛以繼之

白

樂天酒功賛として酒を賛する文の序、劉伯倫晋の七賢の一人を酒を好其徳を頌、文を作、文選に出る酒徳頌、是くも、城、字、白、樂、天、も、賛、を、作、る、と、建、威、將、軍、武、官、太子賓客ハ、文官、春官にその職、教、を、ま、つ、司、嗜、ハ、好、ナ、リ

臨風杪秋樹對酒長年人醉負如霜葉雖紅不是春

白

生計拋來詩是業家園忘却酒為郷

白

茶能散悶為切淺萱道忘憂得力微



色も功を爲して  
淺萱ハ憂を忘  
と道も力を得  
微

若榮期を使兼  
て醉を解セ使  
四樂トハ言應三  
トハ言不

醉郷氏之國ハ  
四時獨温和之  
天に誇酒泉郡  
之民ハ頃未

陰之地を知未

菓則上林苑  
之獻ハ所會ハ  
自消酒是下若  
村之傳所傾甚  
を甚美なり

先阮籍に逢て  
郷導ト爲漸

茶ハ本草に煩悶といはれぬを直す藥之萱ハ毛詩に出  
萱草ハ服して憂を忘る也忘憂草ともいふ功皆淺唯酒を  
夫はさうしてまじの  
忘憂之微一遷作

若使榮期兼解醉應言四樂不言三

孔子泰山に遊び多榮期先生ト云賢人琴瑟を歌ふて  
在に先生何故樂ト問ふ答て我三の樂あり天万物を生一  
人を貴しす我すて人をもバツの樂ハ男ハ學女ハ賤一古男は  
二の樂ハ人生して日月をみんず襁褓をこみんざりあり古まに年  
九十三ニツの樂ト列子に出る酒に醉る樂ハ又淺くする故  
榮期に醉の心解一ハ四の樂ト云いん三ハハハハ

漢の時榮期先生司空より王莽が乱を避て山林に入るとすに  
漢紀に出るに孔子周の代の人として五百餘年前に列子ト人一名ク

醉郷氏之國。四時獨誇温和之天。酒

泉郡之民。一頃未知沍陰之地。江匡衡

暖と寒と酒を飲多しに題の詩序ハ醉郷氏の國トハ酒  
飲の處ハ醉の郷に入ると冬之寒に時も春の天温和する心地  
あるハ四季とも此處をうらと云意えて獨と云酒泉郡ハ漢の武  
帝の開多ハ地名なる故酒多し處にくくる句ハかの郡の人ハ  
一頃未知とあるの地をんんと云いん三ハハハハ

菓則上林苑之所獻。含自消酒是下

若村之所傳。傾甚美。後江相公

上林苑ハ漢の武帝内裏の傍に開く苑とてさうくの果あり  
文選上林苑の賦ハ出くまを禁中の御園に比して云内裏の詩序  
ハまは今席上ハある菓ハ日棠とての會を消ると云消梨の  
名ありはまは是ハの苑より献せるとの意下若村ハ酒多し  
の地名あり頃て飲を甚美なるをい  
かの地の名酒ハ傳來とすふあん

先逢阮籍爲郷導。漸就劉伶問土風



劉伶に就て土風を問ふ

醉を郷にゆゑ其醉の郷に入らば作る元籍字の嗣宗橋樞公劉伶字伯倫も晋の七賢れれど酒城好も道の郷導として醉郷に入らば意か入て風を問ふあまじ彼に就て醉郷の土地風俗を問ふ

邑ハ建徳に隣て行歩するに非境ハ無何に接して便坐忘す

前と詞との作建徳其谷のめてるたもつて用ひく醉の邑ハ建徳に隣てあまじも歩をまひ行ひさぬあま酒酔所がとまじ莊子に我有大樹謂之精種無何有郷と何有んと云意ハ醉郷無何の郷に境を接られ酒に酔て萬事坐か忘るいと坐忘も莊子に出る文字

王勣郷の霞は浪を繋ぎて脆松康山の雪ハ流を逐て飛

王勣郷霞紫浪脆松康山雪逐流飛酒に酔る水に落花を逐る題ハ王勣酒を好し人王勣郷前の詩の醉郷と云じ霞花を云花も霞も紅なるものゆゑ云醉の郷の花ハ水岸を繋ぎひらり脆く落る松康字ハ松康山も醉郷小同雪と云花之上ハ霞かうせて紅と云これ雪にうせ白を云流を逐て飛ハ水に落ると云王勣と松康は上戸也醉を云霞と雪ハ紅白の花浪と流ハ水より題の意と云り

あつた事なれどもちりせまきもあつた事なれどもひておぬと云ハ拾遺集小忌あつた事なれども人のあつた事なれども女ども不盡にひらげさて出らばと有七文字日づもひてとらり大嘗會御嘗會をある時五節かど神又の役仕る人日蔭のうらと云草紙用るを中比より糸はとく神事の時冠かどにうらるもの之是をさて出せし歌のころる盃城月に云け有明の月ハ朝日の出るころ西にむく曉の月も日づのひて出るも有明のころと云なり出ぬはちんぬと云出ぬるといふこと

和漢朗詠集抄卷之五終



和漢朗詠集抄卷之六

和漢朗詠集抄卷之六

雜

山

黛色迥臨蒼海の上泉聲遙落白雲の中

勝地ハ本來定主無大都山ハ人を愛する人に屬す

夜鶴眠驚松月苦

月永國三少

雜

山

山ハ高ク石ある山と云

黛色迥臨蒼海上泉聲遙落白雲中

百丈山に題せし遠山の色黛に似るが大方の也  
蒼海の上にもぐり高山の泉聲雲より落來るると思ふ

勝地本來無定主大都山屬愛山人

雲居寺に遊で作る之景色勝地ハ誰を主とせん  
賞し遊ん人こそ主なる山を愛す人ハ論語に仁者ハ山を樂  
とわり仁惠ある人ハ尊卑をさすまじ慈愛をまらんとは  
山ハ微塵をいとむ故によく大山とるる屬ハつく

夜鶴眠驚松月苦曉鶻飛落峽煙寒

卷之六

雜



月苦曉靄飛  
落て峽煙寒

纨扇拋來て青  
黛露羅帷卷  
却て翠屏明  
かり

衆籟曉小興て  
林の頂老る群  
源暮に叩て谷の  
心寒

遙の峯の暮煙を題せる 鶴の眠も驚て松間り月 都在中  
そのさびしく心苦たさぬ 曉靄はあつこのひさびえ野袋のしと  
滅煙ハ山の峽に雲霧のさびしくさぼとそをのさびし  
体るり又苦をさるるんと訓せ寒をさむらんと訓をるわり

纨扇拋來 青黛露羅帷卷 却翠屏明

遠山の夕煙晴て山の形明らうにんぬと云題之 纨扇ハ 後書玉  
白に絹てさまる扇班女が扇の詩の字を取て 夏の部 納涼の詩

女の扇りて顔かくせるが扇を抛まらば 青は黛の露の見  
ゆるにうささう遠山を黛の色とんかそと山の詩首章に  
出羅帷はうもそのかさし煙にぬるさ 却は煙のさるえ  
翠屏ハみどり色の屏風なる山たよ明はれて山のもえ

衆籟曉興 林頂老 群源暮 叩谷心寒

秋聲多ハ山に在と云題之 籟ハふさふさの音て 莊子に 以言  
地籟則衆籟是已とあり 風作て岩の穴 枯木の穴をどに  
をりしを衆籟と云 秋風に木の葉はあり 色は淡なる  
を林の頂が老るるを群源と云 群源ハこの谷の流るる

方に岩越りつ水音ささるる谷の心寒と云 六秋の意ハ林頂と  
谷心ハ山を云老と寒ハ秋のころ 籟興と源叩ハ秋声と

拾遺集 夕のほろろみささるる 朔日夕月ははるる

大和の三笠山ハ右をうろそ 笠となく唯あさ日夕  
さるるうろそと笠はさすにうろそうろそ

雲のおおまのささるる山おひさうおわし 年の暮はらうつ

拾遺集 年ぬまはと有年のを冬のとあり 雲のおおまをさ  
さるる 越の白山ハ常に雪ある 鳥老まうとさみ雪のつらさ

年の行つらら  
とさるる

みささるるのささるる山はらうつ 年の暮はらうつ

拾遺集 入道 攝政兼家公家の屏風の  
歌らうろそのも 深山うろそ雪うろそ

山水



泰山ハ土壤を讓  
不故能其高  
を成河海細流  
を厭不故能  
其深とを成

泰山不讓土壤故能成其高河海不  
厭細流故能成其深  
李斯

巴猿一叫叫で  
舟を因明月峽之  
邊小停胡馬忽  
嘶て路を於黃  
砂磧之裏に失

巴猿一叫。停舟於明月峽之邊。胡馬  
忽嘶。失路於黃砂磧之裏。  
公乘億

日礙暮山は  
青して簇簇り  
天を浸秋水白  
して茫茫る

礙日暮山青簇簇浸天秋水白茫茫  
西に傾く日ハ山にうつり暮るの遠山簇々つらるる青して  
らん秋の水白くくく茫茫天を浸むらんらん山水の影へ

漁舟の火の影ハ  
寒して浪を燒  
路の鈴の聲ハ夜  
山越

漁舟火影寒燒浪驛路鈴聲夜過山  
臨江と云馬小やとて秋夜の作し海人の漁も舟小火を  
燒魚のうらるる波取とさう水にうらるるを浪をやくと作し秋魚

山ハ屏風に似  
江ハ簾小似る  
を叩て來往月  
の明る中

山似屏風江似簾叩舷來往月明中  
山ハ似てく屏風を立てく江の水青く簾をたつち劉禹錫  
うららに月を叩るる夜船を浮遊ぐ之叩舷楚辭漁父の歌の字

草木扶疎春風梳山祗之髮魚鼈遊



草木扶疎として  
春の風山祇之  
戯を梳魚驚遊  
戯して秋の水河  
伯之民を養

韓康獨往之西  
花藥舊の如  
之舟之泊  
惟新

山復山何の工  
削成青巖之  
形水復水誰が家  
色深出碧潭之

山郵の遠樹ハ雲  
の開處海岸の  
孤村ハ日の霽時

山成向背成斜  
陽の裏水ハ回流  
小似迅瀨の間

戲秋水養河伯之民

江澄明

山水の葉々扶疏ハ枝葉四に布之文鐘草木風にびくハ山祇の髪  
を梳くそある魚驚遊と遊び戯るハ秋の水ガ河伯の民を養  
ふてあると云 鬢子春秋に山祇以草木為鬢以土石為身  
河伯以水為國以魚鼈為民とあるかのと云

韓康獨往之栖花藥如舊范蠡扁舟  
之泊煙波惟新

同前

上は同じ文之後漢書に韓康字伯休仙道を得て山に入  
藥採採て長安の市中に賣とある其人今ハ跡なきハ独往之栖  
ハ山の藥ハ昔ハ羊花と咲サ范蠡越王句踐をたどけ  
吳王夫差殺亡一功成て扁舟に棹一五湖浮びハ古のしるふ  
今も其湖の浪ハ水煙ハうらうらと見るハを新らしと云  
雲の詩に陶朱公とある是なり 稔見合す

山復山何の工削成青巖之形水復水  
誰家深出碧潭之色

同前

上に同ハ文之苔深青ハ巖の形消立と云くもびくもか  
景色ハ何の工のちるぞぞ水の色碧ハ藍城も眼ハ  
ぬらぬらすめる潭ハ誰が家の  
深殿の深出せるもや

山郵遠樹雲開處海岸孤村日霽時

直幹

山路の郵駅の遠ハ梢ハ雲の末らうらに  
海にそ濱辺の孤村ハ霽する時んも

山成向背斜陽裏水似回流迅瀨間

山に斜陽のらる如とびらふ如とあつてさくはんも  
山成向背と云ハ迅瀨の岩をどにせらるハつて回流と思  
拾遺

かゝるのこむらねやうらうら田の川の水のこむらね

物の名にむらねの木ハ題ハてハありハ立田和州ハ  
神南備の御室ハ山ハ龍田川ハ水ハ山水の部ハ入



水 付漁父

邊城之牧馬頻嘶。平沙渺渺。江路之征帆盡去。遠岸蒼蒼。

洲芳杜若抽心長。沙暖鴛鴦敷翅眠。

帆開青草湖中去。衣濕黃梅雨裡行。

水驛路穿兒店。月花船棹入女湖春。

菰蘆抄酌春濃酒。舳舻舟流夜漲灘。

水 付漁父

邊城之牧馬頻嘶。平沙渺渺。江路之征帆盡去。遠岸蒼蒼。

洲芳杜若抽心長。沙暖鴛鴦敷翅眠。

帆開青草湖中去。衣濕黃梅雨裡行。

水驛路穿兒店。月花船棹入女湖春。

菰蘆抄酌春濃酒。舳舻舟流夜漲灘。

菰蘆抄酌春濃酒。舳舻舟流夜漲灘。

月永國字抄

卷之五

新

四

積陰の氣形は水と魚獵は事とまるとの

謝觀

胡國をこぐる邊土の城外の牧に草飼て放馬。馬轉て平沙渺々野原に往來の人もりたさる。入江の波路小泊る舟は帆をたきて漕征去て出尺。一は暁の賦なり。

樂府の文と漢の武帝のちりる昆明池。春水滿ると云願く。西方身毒國に討んと思て彼地を。都の坤に方四十里の池をほり。船軍は舟を。仍て昆明池とよぶ。水中小土よりて洲を成。小芳菲の候は。杜若。菰。蘆。春の暖る。沙の上は。鴛鴦敷翅の眠るの。白。

客の湖南にゆく。送る詩。客の舟。帆を開て湖の中。漕去。青草湖。洞庭湖の。旧。五月雨の比。を。日。夜。を。比。して。歩。行。梅。の。黄。梅。雨。と。云。落。比。の。雨。梅。雨。と。黄。梅。雨。と。云。

蘇州。行人を送る。水邊の。驛。の。路。を。見。送。と。云。月。の。光。敷。る。と。は。光。を。穿。る。と。ある。花。や。ら。う。と。さ。る。船。に。棹。と。云。女。湖。の。い。づ。れ。其。地。も。の。ど。う。か。く。春。に。入。こ。も。す。ん。花。の。字。も。春。の。を。め。あ。り。

戲。ま。に。漁。父。の。家。に。あ。る。と。ま。ま。作。し。ま。し。た。器。も。る。た。ゆ。菰。蘆。の。柄。抄。は。つ。ら。り。酒。抄。酌。ち。た。舳。舻。舟。に。夜。に。來。し。と。張。る。急。灘。か。く。さ。る。



閑居ハ誰人ハ於屬ス紫宸殿ノ之主也也秋水ハ何レ之處カ閑見ス朱雀院ノ之新家也

釣ヲ垂セ者ハ魚ヲ得ズ暗ニ浮ル遊ノ意有棹ヲ移ス者ハ唯雁を聞キ遙ニ旅宿ノ之時に隨フと感ズ

沙頭ニ印シ鷗ノ遊處ハ水底ニ書キ雁ノ度時ヲ摸ル日脚ハ波平ニ孤嶋ノ暮風ハ頭岸ニ遠シて客帆ハ寒シ

閑居ハ屬於ス誰人ノ紫宸殿ノ之主也也秋水ハ見ル於テ何レ之處カ朱雀院ノ之新家也昔々

延喜ノ御時ハ太上天皇ノ鏡伴皇朱雀院ニ閑居シ秋水ハ樂シと云フ題シて文會ノ有ル序ハ閑居ノ事ヲ論ズ人トして紫宸殿ノ主ト上天王御位也ハつゝも閑居シてあるノ秋ノ水ハもしつゝも何レ之處カと云フ此ハ朱雀院ノ新ニ家ニこそあるト云フ北ノ朱雀ノ西ニあるノ殿ハ谷ノに世々の帝御讓位ノ後ニ御座スと云フ

垂釣ス者ハ不得ル魚ヲ暗ニ思フ浮ル遊ノ意有移ス棹ヲ者ハ唯雁を聞キ遙ニ感ズ旅宿ノ之時に隨フ同前

前ハ朱雀院ノ庭ノ池ニ月ノ影ノ雲ノ客ノ遊興ヲ云フ題シて前ハ云フ釣ス者ハ魚ヲ得ズ暗ニ思フ浮ル遊ノ意有移ス棹ヲ者ハ唯雁を聞キ遙ニ感ズ旅宿ノ之時に隨フ同前

沙頭ニ刻シ印シ鷗ノ遊處ハ水底ニ摸キ雁ノ度時ヲ摸ル日脚ハ波平ニ孤嶋ノ暮風ハ頭岸ニ遠シて客帆ハ寒シ

濱ニ日脚ハ西ニ傾キ暮ル風ハ吹ク頭岸ニ遠シて客帆ハ寒シ年々徒ラて氣ノもなシ水ハちりりト流ルと云フ花ノちりりト流ルと云フ

六十四代圓融院ノ御時ハ内裏ニ資上ありて大政大臣兼通シ家ノ堀河ニあり其ノ女ハ帝ノ中宮也と云フ行幸あり内裏ニ造シ言ハさて



住のさのち御位をりさせむひふさび堀河院かまき兼通公  
の兼通公在世  
ふさびのひのひ水上の定めてるさ君が代に  
ふさびすあると水の縁語よそあり

禁中

公の門の禁制ありて妻に人を  
いさごるゆへ禁中と云

鳳池の後面新秋の月龍闕の前頭薄暮の山

鳳池後面新秋月。龍闕前頭薄暮山

秋月高懸空碧外仙郎靜翫林禁闈間

秋月高懸空碧外。仙郎靜翫林禁闈間

禁闈の間

八月十五夜崔大と云官人直月をきて酒を飲をるる白  
樂天の送詩之碧の空に月が高く清く仙郎内裏  
の宿直をる崔大は云て云り禁中の闈門の  
あつたむら

三千仙人誰得聽含元殿角管絃聲

學業成試て士に舉らる城及第と云是其時の詩と章孝標  
仙人の文人は仙人多し中の我の此管絃絃聽と云て及第  
とげつる城と云ふなり含元殿の  
禁中の殿の名なり

雞人曉唱聲驚明王之眠鳥鐘夜鳴

響徹暗天之聽

漏刻の策之器の水を盛下に穴を穿てあつる水は漏中に時刻  
める矢は建時計する雞人の漏刻を司る官人の時表矢をのめ  
雞人の名は明王是は聞て眠を驚め夜鳴暗天に内裏  
の時鳥鐘響耳に徹して聞ると百官禁中に卧するとのうけて云

朝候日高冠額拔夜行沙厚履聲忙

連句一説に作者菅公と朝に内裏に候候に作者不知  
日高ておそかり冠の額拔るる急ぐ大内夜行の官人



庭の沙上に履城むくありてさるるの一刻より子の四刻まぐ  
た近衛世の一刻より寅の四刻まぐ右近衛の司夜行あり其刻  
履城まぐ弓絃打るをどて某と名乗子の三ツ世の四と  
奏するにあり近衛司のとのおやと云又の夜行翁と呼あり  
所垣を清士ののく火にわぬも絃まむのうちふこそたけ  
中務

大内の御垣城守夜に通用の門一所むく内よ火城の守る  
左衛門右衛門の下ふつふ士の後也(衛士と云まのさふひ  
とむむまのひの火城く戀歌るま  
とよ上の五文字こそ禁中の部入  
拾遺

延喜の御時八月十五夜藏人所のこのとも月の宴い  
るふとあり藏人所の校書殿にあり則富九大臣の帝の御坐  
より遠るまがらふる月の光さやけさ  
天子の御前清明おまひやら

古京 古京之奈良の都藤賀の都るもの

緑草ハ如今麋鹿の花紅花は定て昔管絃乃の家らん

緑草ハ如今麋鹿の花紅花は定て昔管絃乃の家らん

大和国奈良の都元明帝より光仁帝まぐ七代の京城  
いふ相武帝の延暦年中今の平安城に遷され今此詩ハ奈良の  
古に都あり地城過て作てこも繁花の地ふて有んも緑の草茂  
今六鹿や麋の引る花とら其中に紅の花の咲る知こそ昔管絃杯  
せし所よりやあふんと思ひや  
感慨たり

新古今  
いそのうらむらひの城をそまむむまはむく花咲あかり  
和州石上いむむ安康天皇穴穂の宮にまぐ仁賢天皇廣高の宮  
かまろ都のりゆふらにまぐと云又布留のつこころ地めくらや  
云けえ大宮人のむじかむ花が今も咲て  
花かろく祿とも春のそのまひ一と城云

故宮 付故宅 宮闕の故荒るる古宅ハ常人のすみあはせしころなり

陰森古柳疎槐春無春色獲落危牖

明永國家抄

卷之六

唯

八

故宮 付故宅 陰森古柳疎



壞宇。秋有秋聲。

公兼億

色無獲落たる  
危牖壞宇。秋  
して秋の聲有

漢の武帝の造るる連昌宮の荒るるを陰森古柳枝として  
疎るる樹を多くある古木也。春はむくても葉をめぐらす花  
を咲かす春の色をぬ獲落るる危を牖壞るる宇をよそそし  
古に宮殿秋の景色いよ哀なるに風の聲として吹わらへる

臺傾て、滑石猶  
砌に殘る簾斷て、  
眞珠鈎の満不

帝の御文の公主と云其住るる舊宅を題して臺を傾て  
滑のみみりたる石礎と云る殘眞珠と云る簾と斷て殘るる  
鈎ともうらぬで翠簾はうらぬ  
くは成鈎と云砌の塔下く

強吳滅兮有荆棘。姑蘇臺之露瀼瀼。  
暴秦衰兮無虎狼。咸陽宮之煙庁庁。

強吳滅て兮荆  
棘有姑蘇臺之  
露瀼瀼。暴秦  
衰て兮虎狼  
無咸陽宮之煙  
庁庁。

河原院の賦に嵯峨天王の御子融の大臣と云ハ限るに  
て後故宅のあまてたるるを賦せし此句の心ハ吳王夫差の強り  
一も越王句踐に滅さるる姑蘇臺とて名高れうそをわらう

老鶴從來仙洞  
の駕寒雲在昔  
妓樓の衣かん

嵯峨天王の住るる宮のあまてたるる故宮に老るる  
鶴の残り住るるの仙洞の駕と云わん雲のこれびるる樓とて  
舞臺の舞臺は妓樓と云

孤花衰露啼。殘粉。暮鳥栖。風守廢籬。

孤花露を衰て  
殘粉に啼。暮鳥  
風に栖て廢籬

後の旧院に題する孤花。一房開る花之露を美人の涙ハ良春道  
るると紅粉は施しはるるの傷は想像するら残



荒籬見露秋蘭泣深洞聞風老檜悲

花の色は残粉も夕暮の鳥の風にかびく枝に纏て廢さる  
籬は守わるのこゝろて人の音をなくさむいふこと此の  
荒籬見露秋蘭泣深洞聞風老檜悲  
仁和寺寛平の故宮荒古き檜一本立ちて成りて昔は源英明  
思て作ら荒ら離に秋の蘭露にうやいさる昔はこひて  
泣くもゆる深さ洞のこゝろ年経る木の風に  
いさぶも悲のこゝろとこゝろなり

向晚簾頭生白露終宵床底見青夫

我が住屋舎の壞らるは作ら棟をよめて夕の白露  
簾のつらつらつて床底に在る終宵青天はうらむ  
古今六帖  
君をうてあはるる茶の板るうら月のもろもろはぬきうら  
うら内裏の跡の月げんて感慨極開う露ののろもろ袖は  
ぬもろかきまてあはるう月のもろもろ涙の袖はぬり古は思ふ  
思あててうらう涙う流る電の浦さびくもろもろうら  
古今集哀傷の部に河原の丸のおひまうちごも身まうて後  
かの家にまうて有るるは海がまよと云ぬのうらぬはくけりうら  
よめる五文字君ままごとなり楳栗と浦さびくもろもろ  
河原院ハ六条坊門の南万里小路八町四方と云  
いふはうらうやうのかもろもろ人花をうらうら  
いふはうらうやうのかもろもろ人花をうらうら  
いふはうらうやうのかもろもろ人花をうらうら  
いふはうらうやうのかもろもろ人花をうらうら

仙家付道士隱倫

仙家仙人の言に執名に老て死せざるは仙と云仙は儼  
として山に入ん故に字は仙と云るに人山に儼り道士仙  
術はまるび得る人隱倫かろもろもろと謂て  
賢人世はさけ山谷にのろもろかろもろと云

壺中天地乾坤外夢裏身名日暮間

世の無常は作らる昔唐の長安の市に藥を賣老翁元稹  
あり其形奇異藥の價は論せず汝南の費長房市橋あり

仙家付道士隱倫  
壺中の天地乾坤の外夢裏の身名日暮の



藥爐に火有て  
丹伏應雲確に  
人無して水自  
春

山の底に薇採  
雲狀不洞乃  
中に樹栽裁鶴  
先知

三壺雲のむく浮  
七萬里之程浪  
分五城霞のむく  
時十二樓之構天  
に挿り

奇犬花に吠聲  
紅桃之浦に於流  
驚風葉振香  
紫桂之林を於分

樓上にあつて是れ彼翁の壺置て日のく時人れ  
もず壺中に飛入度々々々あやも人々々々  
ちりりり或時翁の云君に金骨の相あり仙道學なるあり  
日晩て來りてと教のむく至る我れ從て入ると壺中に入長房  
つゝ入る壺の中天地日月宮殿樓閣の侍者數千あり  
て老翁扶杖敬小長房樂にさつるや古鐘をさつる  
竹杖は葛波と云ぬの水の中へ投捨るは忽ち青龍とる  
天に昇去と神山傳ふ出元稹幽栖の詩も已が栖居壺中  
の天地に比し別世界なる意乾坤の外と作さる莊子夢裏  
小胡蝶とるて花苑にあそぶ覺もさつる一且とさる佛  
家の且暮もさつるに意成りて世上の身名夢の城は  
藥爐有火丹應伏雲確無人水自春  
郭氏の人仙術を學山あり遇は其栖居を作さる白  
藥爐燃する壺の人も金液丹銀丹と云仙丹が伏りあるん  
と思さる雲確ありてあむ人もさる水は機関のものと  
春のひると人も仙家の壺の雲のさつる人も人雲母の膏食

山底採薇雲不狀洞中栽樹鶴先知  
隱者山居せるは作ら山底に薇採挿雲か 温庭筠  
狀さるてや世と上とさる山居心のさる雲は山の主とせ意  
かて作まり洞の中に樹栽栽さる鶴が知てものを栖と思さ  
人里とさるるりて物さつるさるる

三壺雲浮七萬里之程分浪五城霞  
時十二樓之構挿天 都良香

神仙は題とさる策の文入海中の三山が壺後蓬壺蓬萊瀛壺  
瀛洲と云其形壺に似るさる相と七萬里上の雲のつと下ハ  
大海の波はさるてあると崑崙山に五城十二樓あり仙人常に居  
處と拾遺記や史記にあはる神仙を虚事と云くはと雲と霞大と云  
奇犬吠花聲流於紅桃之浦驚風振  
葉香分於紫桂之林 同前



謬入仙家入て  
半日之客爲と雖  
恐ハ舊里に歸て  
纒逢七世之孫に  
逢下と成

上と同ト文之晋の大康年中武陵の人溪に魚釣するに桃  
の花流る來る源は尋のなるに桃多く咲き其のくに龍鱗  
の文虎豹の斑あり大あつて奇聲して吠く其地の人逢て問  
るに秦の乱は避この処に來數百年経ると桃源記に  
此心作る驚風あり風紫の桂ハ仙宮の樹也天台山の石橋  
成渡んとせ一人あり空に聲あつて此橋成ると器にあはれ  
云らば此山にクク住ハ仙術を行ひ後に桂の花の香成り  
て仙道成得しと云く桂父と云此故事成はるなり

後江相公

丹竈道成て仙室  
静なり山中の景  
色月花低

丹竈道成て仙室  
山中の仙人の住まを跡ある心之四韵秀句にて比此集  
菅三品  
小入是起句之丹竈煉る竈のこわつて仙人の室人も静  
物道成就一夫昇せ一跡とらんあつ山中の景色も

石床洞小留て嵐  
空拂玉案材に  
抛て鳥獨啼

石床留洞嵐空拂玉案抛材鳥獨啼  
上の詩の胸句ハ仙人の卧る石の床洞の中へのこり留て同  
ある塵埃拂ふ人もからと嵐がちか玉の案もいづれに林に抛  
ててあり仙人去つて音つるものもあはれ

桃李不言春幾  
暮煙霞跡無昔  
誰栖

桃李不言春幾暮煙霞跡無昔誰栖  
こまハ腰句ハ仙の去る跡に桃李の花の昔にうらげ咲き  
いとも非情のそのあ仙人去て幾春成過せや問いも不言  
漢の大將軍李廣武威るびからしども口帯て言て希之れ  
ども門前市成る車馬絶がら成史記に桃李不言下自



王喬一い去い去い去い  
雲長斷い早晚い笙い聲い歸い故い溪い  
の聲い故い溪いに歸い

南山いに月い落いて秋い  
の鬚い白い穎い水いに波い  
揚いて九いの耳い清い

虚澗いに聲い有いて寒い  
溜咽い故山いに主い無い  
して晚雲い孤いるい

夢い通いるいに夜い深い  
蘿洞いの月い跡いを尋い  
るいに春暮い柳門い乃い  
塵い

成蹊と云はるるに桃の仙家の樹に煙霞のふりびくをふて  
主にあとよみあまのむらじむ誰が栖と云てもえぬ桃李に申誰が栖

王喬一い去い去い去い  
雲長斷い早晚い笙い聲い歸い故い溪い

こまの落句の上に通律一章之周の天王の太子王子喬一同  
又王子喬好て生れふさ伊水のほとりに遊び後仙と云る七月七日  
白鶴の乗候氏山に來て雲中に笙吹くと列仙傳に出云て  
小云仙と王喬に比し早晚溪に歸來んと云故の字は故郷と云

南山いに月い落いて秋い  
の鬚い白い穎い水いに波い  
揚いて九いの耳い清い

山中いにて懐いひ汝い述いるいるい高い洛い山いの四い皓い雲いの詩い秦いのい後い江い相い公い  
乱い汝い避いてかいこい居いるい如いの月い落いと云て齡いの老いるいにいるいるい又  
春復物盛に秋冬いのい衰いるいもい秋いのい鬚いとい作いりい堯いのい時い許い由いとい云  
賢人い世いにいむいるい穎い川いのいほといりにい隱いるい堯い位いはいあいんとい召いれいるい  
憂いしい汝い聞いりいといてい此い川いにい耳い洗いひいるい時い巢い又いとい云いるい牛いのい水いをい  
んとい來いりいかいてい面い洗いてい後い耳い洗いへいるい先い耳い洗いあいらいはいいいるい  
と問答いてい帝い堯い我い汝いりいてい九い州いのい主いといせんいとい云い我い其い聲い汝い不い淨い  
とい因いてい耳い洗い清いむいとい巢い又い言いていふい楠いのい木いかいらいむい

嶮峯いにい生いまいすい載いるい車いのい路いかいくいるい汝い便いかいらいむい五いもいちいういるい  
及いすい汝いもい深いくい隱いといはいるいとい聞いすい其い汚いるい流いのい末いにい水いをい  
牛いのい口い洗いへいとい牛い城い水い上い牽い行いりい此い故い事いはい水いをい掬いむい  
波い揚いとい作いるい九いのい耳いとい云い八いのい耳い洗いとい先い九いのい耳い洗いとい

虚澗い有い聲い寒い溜咽い故山い無い主い晚雲い孤い

山いにい隱い士いとい云い題いとい賢い君いのい世いはい皆い出いてい仕いるい云い紀い納い言い  
澗いもい虚い溜い水いのい流い寒いいいとい咽いびい隱い士い出い故山いにい主いといるいとい云い  
今眼いにいんいもいものいのい晚い景いのい  
孤い行いのい雲いのいといるい

通夢い夜深い蘿洞い月い尋跡い春暮い柳門い塵い

上古いのい賢い士いのい風い儀い汝い去いるい心いのい題い入い蘿い深い洞いの中いにい管い三い品い  
とい賢い者いあいりいとい汝い汝い覺いていまいるいついにい其い賢い者いにい往い逢いんい  
とい飛い立いてい思いふい夜いもい深いくい月いのい光いていりい渡いるいとい云い夢いをい  
とい心いづくい後漢いのい邊い詔いついにい昼い寢いすい弟い子い諫いをいいいてい寢いて  
ハ周い公いとい夢いはい通いしい静いといてい孔子いとい意いはい同いういとい云い故い事いも  
ついとい下いのい句いハい故い人いのい栖いとい云いてい跡いをい尋いむいといハい春い暮いてい柳い門いの



塵のこゝろ陶潛字淵明彭沢の令其門に五株の柳を植  
其下に酒を飲つてのころ時の人五柳先生と号此故事塵ハ  
麴塵とて柳の葉の黄るを云春の巻  
其外往々秋くこゝ出たり

古今  
のこゝろ山家の葉は露のまじりてをて我はるいん素

仙宮に菊をけて人のいこころをばあるとあり寛平の御時  
菊合せりこころに盃の臺のまじりての作物成り結構を  
してあり其つゝ露の間は時の間成るなり彭祖ハ菊成  
七百歳成るなり晋の王質木樵に行て田基成りて斧柯の  
くもる事故事酈縣の民菊水成のこゝ  
上壽成得るもろひの故事なり

山家

遺愛寺鐘鼓枕聽香爐峯雪撥簾看

白居易廬山の辺に山莊あり草堂成り作東の壁に  
五首の詩を題せ其向に山莊近き遺愛寺の鐘鼓を  
居たり其雪成もるる山居の景色心足成り

蘭省花時錦帳下廬山雨夜草庵中

白氏雨の夜独宿して都の友寄る上の句其友朝に白  
居て榮達にやるさゆ蘭省ハ尚書省本朝の大政官の位  
繁花の處の花の時錦の帳の下に榮達して我をすらすら思  
やらる夫に引く我ハ山中雨夜の草の庵に在り

漁父晚船分浦釣牧童寒笛倚牛吹

石壁の水のぞめる閑か上て賦せり白も晩景ハ漁父  
父が此浦彼浦と分て釣成りて居る寒笛の音の間は牧  
童が牛を牽き吹く倚りたり

王尚書之蓮府麗則麗恨唯有紅顏

之賓嵒仲散之竹林幽則幽嫌殆非

遺愛寺の鐘ハ枕  
鼓成りて聽香爐峯  
の雪ハ簾成り撥て看

蘭省花の時錦  
帳の下廬山の雨  
の夜草庵の中

漁父の晩船ハ浦成  
分て釣牧童の寒  
笛ハ牛に倚り吹

王尚書之蓮府ハ  
麗則麗恨唯  
有紅顏の賓  
ハ唯紅顏の賓  
の有る也嵒中



散之竹林幽  
く、殆素論之士  
に非ず哉

南に望則關路  
之長有行人征馬  
翠簾之下に於  
駱驛より東に顧  
亦林塘之妙有  
有紫鴛白鷗朱  
檻之前に於

山路に日暮耳に  
滿者ハ樵歌牧笛  
之聲澗戸に鳥歸  
眼に遮者ハ竹煙  
松霧之色

花間に友を覓  
む鶯語交文洞  
裏に家移鶴  
隣トす

素論之士

尚齒會の詩の序唐の會昌年中に白居易六人の叟を招  
らるるに、入宴會なるの官位貴賤を論るに年長せる以上は  
列給尚齒會と稱し齒尚、此會今に藤の亞相在衡卿  
の山莊にて此會行ふとき時の序に王儉字仲空南齊の尚  
書令と云官位を述り其宅に蓮ありて蓮府と云これより  
大臣は蓮府と云王儉が府蓮ありて麗もも紅顔の客の  
ありて此會かゝるに嵇康字叔夜晋の中散大夫六翁ともの  
竹林に遊び一人其宅をひら開幽なるといふも素昔の事  
七賢の事、前の竹の詩の叙を會の叙、末卷老人の詩の出

南望則有關路之長行人征馬駱驛  
於翠簾之下東顧亦有林塘之妙紫

鴛白鷗逍遙於朱檻之前

源順

白河院にて文會あり其序に其地今の法勝寺の跡をい  
南に粟田口逢坂の關路をさるる長くつらり行人征馬の通  
駱驛翠簾の外に過るる近く東の方院中の林塘  
景色妙に紫鴛や白鷗さるるの鳥朱檻の下に逍遙

山路日暮滿耳者樵歌牧笛之聲澗

戸鳥歸遮眼者竹煙松霧之色 紀齊名

三月末つら遊覽の詩の序に、三月末つら遊覽して山路に日  
暮るる樵夫の歌や牧童の笛の聲が聞ゆるの事、澗の戸  
小鳥も歸り松竹に夕の霧煙の色のを見て  
さびしき晩方のけしき述ぶるなり

花間覓友鶯交語洞裏移家鶴ト隣

山居トす題に山に栖て花を友とす鶯のこゝつるも  
語を交友と思ふ家移洞に移るも其隣ハ鶴が来て居  
處とす山居閑寂さぬ世上の人交友とせどもさるる友ハ何れも  
あると云意トハ我をのこ領するは云はるる詩のこゝつるなり



晴後青山臨牖近雨初白水入門流

石に觸春の雲ハ枕の上生山峯に銜曉の月窓の中に出

田家 碧毯の線頭早稲抽青羅の裙帯ハ新蒲展

守家一犬ハ人ヲ迎テ吠野に放群牛ハ犢ヲ引テ休

野酌ハ卯時葉露の露山畦ハ甲日稻花の風

明永國字抄

晴後青山臨牖近雨初白水入門流  
雨過雲晴青山の青みも牖近く臨初雨のうらみ  
白水ハ溝にあふささく門の内流  
都良香

觸石春雲生枕上銜峯曉日出窓中  
山寺に宿して作る石根に觸て起る雲ハ枕より生ずる  
思ふより野處のさびさ峯にさむく曉の月も窓の内より出ると思  
橘直幹

山里ハ地のみひささく我わき世のうらみはほろろなり  
山住ハ万の事足らざる長かも寂をきてくもつらさき世の  
うらみはほろろなり住むはたしな事成るぬ詞  
湊人

山里ハ四時ともの淋しき春ハ花復ハ郭公秋ハ紅葉の  
往來もあつらん人めをもんはる木の葉ちり草も枯る比の  
さうのたよりなきをたしな思ひにんをとも人めの離れ  
草れり  
宗子

田家 田畑に近き家なり

碧毯線頭抽早稲青羅裙帯展新蒲

春湖ハ題せし毯ハうもと訓系よて厚く織る敷の之白  
暮春の比早稲の出る碧の毯の線頭ハ似たり早稲こそ  
と訓づる蒲のうらみ展る  
青羅の裙や帯に似たり  
此詩早稲の字めて田家の部に入らる

守家一犬迎人吠放野群牛引犢休

飼犬の足をもつる人吠野に群る牛ハ犢ヲ引テ休  
休みあつる由田家の餘るまののり  
都良香

野酌卯時葉露山畦甲日稻花風

野酌ハ野邊に酒飲卯の時に酒飲ハ葉露の味美なり  
白氏文集卯時酒の詩あり又来木の洞にさるり水の味美なり  
りる酒もさび酒飲初るる葉露の露ハ酒のて山畦ハ山田の  
畦ハ立秋後の甲の日の風に百穀熟と云也稻ハ花さく風と作  
紀齊名

卷之六

佳



蕭索する村風ハ  
笛吹處荒涼  
隣月の夜橋  
程

蕭索村風吹笛處荒涼隣月擣衣程

蕭索ハ風の聲荒涼ハあまてそらゆらぐ風の抑笛の音高相如  
月の下に擣衣のさくらびと田家の秋のさくら隣の家ハ家居く  
妻の田人ふまう夢を我ハ花にん成つるころか 秋交りは

春の田に種蒔時故人ふ住まをとうきりう治まる世の目  
もこうちうさぬ古今六帖ハ貫之の歌あり

時をばさかといふこひぬぞるもたてさささかん 契之

五月の時或過一かは早苗も甚老ぬづも雨か  
ささで早く植よと田子ハ早ひ女と

このよとせさぬはじりこのまに輪象とよびて秋風の吹散

古今にのみ人あまどとありーうハーガヤる成清てよむ  
箱葉の風に時のうけは思ふて苗て植ハ昨日のどと

隣家

三徑の夜緑揚ハ  
両家の春作宜

明月好同三徑夜緑揚宜作两家春

元ハと家隣ハ意作詩の胸の句ハ明月の光好て白  
吾家も足下の家も同トく三徑夜照してさささか將詠字ハ

元卿舎の沖に三ツの徑あり蒙求ひさしり人家ハ三ツの徑あり  
両家の境に揚らある其縁るハ我家の春かても有又足下の家

の春かてもあると陸惠曉と張翥と隣ハ池に柳あり一  
ふまて作さる其故事前卷るびハ此次菅三品の詩ハ出

可獨終身數相見子孫長作隔牆人

上の詩の落句ハ世上ハこも我ハ独身終るまで數同  
度ハこの面會は子孫も互ハ永々牆一重隔る近隣の人ハん

池邊別業是何人間道陸張昔卜隣

池の辺の別業ハめてあるは何人そ昔陸惠曉と張翥菅三品  
と池城ハと家隣ハと道ハ聞及リトハ地の吉凶ハ住れとす

落枕波聲分岸夢當簾柳色两家春

獨身終るまで數  
相見可子孫長  
牆ハ隔人と作

池邊の別業ハ是  
何人ぞ間道陸  
張昔隣ハト

枕に落波の聲ハ



岸波分夢。簾前  
當柳の色ハ兩家  
の春

春煙迎に讓簾  
前の色曉浪潛  
分枕上の聲

山寺

千株の松の下雙  
峰の寺一葉舟の  
舟の中萬里の身

更に俗物の人の  
眼に當無但泉  
聲の我心洗有

朝天の門改不  
便求車之所作  
閱水の橋變不  
以到岸之途と  
爲せり

前通絶句一章陸張家の間は池ありて其波の聲ハ同  
此岸彼岸波ころち又口の夢成驚すよておん其地辺の柳の色ハ  
兩方の簾にあつてらんもハ兩家  
の春ふてある前の句あつて解す

春煙迎讓簾前色曉浪潛分枕上聲  
春煙ハ柳の色成煙はらんせと兩家の中になむ柳の色直幹  
ふうひに他の家の檐の前にあると見えん池に曉の浪のいや  
ら聲ハ兩家の枕の上にあつてらんもハ  
こころも前の二三章の陸張が故事ん

古今六帖かららぬ時とあり貫之の歌と垣成つたつと  
云うけあり色ももぬ時にらん人ともかとなり

山寺

千株松下雙峰寺。一葉舟中萬里身

白氏香山寺ハ隱居の詩ハ數千株松樹あるとある  
下に香山寺と遺愛寺と雙なるありて栖んたる景色一艘の  
舟に乘萬里の波成るる人の上舟をひひり句ハ散る  
一葉水に浮かんでる舟造るとある一葉と云

更無俗物當人眼但有泉聲洗我心  
靈岩寺ハ宿其景色成作ハ世俗雜染の境界ハ七七  
ハす飛泉の音ハ心の塵垢成洗て潔くもる

不改朝天之門便作求車之所不變  
閱水之橋以爲到岸之途  
野相公

滋野井宰相吾家成寺とて兼服寺と号す其寺に法會  
行法華講あり時の詩序ハ天子ハ朝セし時出入る門を  
改す其法佛求車の門と云ふ法華譬喩品に佛の方便を  
か一乘の法を説て衆生引導く成羊鹿牛車平等大  
會の車かどいふと云ふ其法成求る心とて求車と云ふ  
閱の字和訓もふとあり橋成つて水成すせまけて其



如渡又文選に川に水と云に岸に此岸より彼岸に渡りて  
出仕せし時に渡りたる橋は其より無餘涅槃の彼岸の道と爲  
と云く佛家の煩惱即  
菩提のころはさくめり

策馬來時。只思風煙之可翫。逢僧談  
處。漸覺世俗之皆空。

源英明

馬に策て來時  
風煙之翫可也  
思僧に逢て談す  
處。漸覺世俗之皆  
空。けりこと法覺

人の鳥路の如雲  
我穿也出地是  
龍門水越趣  
登

人如鳥路穿雲出。地是龍門越水登

大和國宇多郡龍門寺にむし勤操僧正早の時  
雨洗新石上布留明神よそ法華經讀誦ある藥草喻品  
いりて小龍現し雨降り此處に寺建龍門寺と名づく  
此寺に詣て作めし詩に此寺に登りて高く空を越て雲

飛泉越上まはるる龍とありて天に沖るる龍門と云  
今此寺も其より水越趣て登山するも越除珍切履

三千世界眼前盡。十二因縁心裏空

竹生寫の詣て作る之近江の湖にさく入渡して世尊  
我觀し盡せる心は云三千世界ハ須彌山にある世界は一國土  
と云ふは三千つとて小千界と云ふは一千つとて中千界と云ふ  
一千つとて大千界と云ふは三千つとて三千大千世界と名づく

又貪嗔癡の三毒は各一千の煩惱具もるは三千世界と  
云下の句に此處より十二因縁は觀するは諸法も心の内  
か空々として煩惱の結のころはかきと云意之所謂十二因縁ハ  
無明過去して起る煩惱は胎内に名づくも以前の中有り

行父母交合の義以上の二因過去の二因識父母交合の  
胎母の息の入るは胎内に託るは名色名は心落色は滴  
水赤白其時形肉團の正識心溜水に託て和合する  
六入胎内して眼耳鼻舌身意の六根のさち現るは

三千世界の眼の  
前に盡十二因縁  
心の裏に空



泉飛雨聲聞の  
夢洗葉落は  
風色相の秋を吹

觸てて胎内に出二三歳の間に受領納して松と思ひ  
竹の竹と思ふ四五歳の後苦樂取捨の差別あり以上は現在  
の五果之後十四五歳の後物に愛を心ある比を云取二十歳  
の後物に執着せざる有義取と同一以上は現在の二因なり  
生現在の二因にありて未來の生感せざる老死今生の身の  
をてに死する以上は未來の二果之過去の二因現在の五果現  
在の二因未來の二果此因果よりなる此因果と云此因果は  
生死の絶絶より三因に流轉する此嶋の境地の幽玄を  
心の裏に空す作しん良香上の句は作自愛下の句を思  
つひひるに辨財天夢中に句は教と云怪し好事の説  
泉飛雨洗聲聞夢葉落風吹色相秋

石山寺に詣て作る聲聞とい僧云飛泉の音雨高相  
以て僧の夢が驚す意洗心の垢洗ふ色相有爲有  
漏の法の色ならぬ色なる云樹の葉はさふ山峯の嵐  
に草木も無常遷變の仮法かて盛るり色もらうへ黄葉  
秋より散失る哉

拾遺

やまての入おれひけりさくはるるおとぎぞうる  
くどぬ日の暮ぬる其外  
解かちるるべしと也

一のりてすまるともさびしくも花も人もあはれ  
園城寺に御製詞花集はらるぬさうかともあり  
出家御修行まゝ櫻の花夢下はやまひるるま

花山院

佛事

月隱重山兮舉扇喻之風息太虚兮

動樹教之

智者大師

摩訶止觀第一の文之釈尊法華經説しに上中下根  
の機にまごひ法譬因縁の三周の説は諸けさ譬説の  
心成釈も又かて上根の弟子は法を聞て悟中下根の輩は迷  
をてて月の重る山はくも風の太虚はやくもるらるる



願ハ今生世俗文字之業狂言綺語之誤以翻當來世世讚佛乘之因轉法輪之縁と爲

願以今生世俗文字之業狂言綺語之誤翻爲當來世世讚佛乘之因轉法輪之縁

夏の間三種の止觀成説章安は此段大師入滅の後有縁成利もんか説て止觀成記すと云

唐の大和三年より十二年の間詩賦八百首十卷と龍門の香山寺の経藏の納り白氏洛に在り時於て其序有り狂言綺語ハ詩文成りて佛道修行の外に諸法實筆成法華安樂行品に戒あるも誤と云されども諸法實

百千萬劫菩提の種ハ十三年功德の林

百千萬劫菩提種ハ十三年功德林

白氏鉢塔院の如滿大師に從ひ毎年八齊戒成受る白氏九度なり其法恩の深しと成思ひ贈る詩今此戒を受

十方佛土之中ハ西方爲望九品蓮臺之間雖下品應足

十方佛土之中ハ西方爲望九品蓮臺之間雖下品應足

深草の極樂寺昭宣公の建立其願文ハ十方の佛土あまとも西方極樂淨土弥陀如來のまはる方こそ望むなり



東方施德佛東方无憂德佛南方耨檀德佛西南方施佛西方无量壽佛西北方樂德佛北方惟德佛下方命德佛上方光衆德佛中央大日如來十方国土如來下之品以上中下之三品あり三々合て九品の佛は蓮臺より有進無退の如く下品あり

十惡と雖引攝す疾風の雲霧と披すも於甚一念と雖今必感應す之を巨海の涓露に納めし

雖十惡今猶引攝甚於疾風披雲霧

雖一念今必感應喻之巨海納涓露

極樂寺の梵僧の文の彌陀の悲願十惡の人は猶後中書に引攝す疾風の雲を拂ひ霧を披し速く身三口四意三て殺生偷盜邪淫の三身に行ひ妄語綺語惡口妄言四口口の言貪欲嗔意愚癡の三意の取作この十惡の稱一む念する少の善根をも捨るる巨の海の涓露の微なるをうけ納めて

昔切利天之安居九十日赤梅檀を刻而尊容を摸し今跋提河之滅度二千年紫磨金成塔而兩足成禮す

昔切利天之安居九十日刻赤梅檀

而摸尊容今跋提河之滅度二千年

瑩紫磨金而禮兩足

仁康上人丈六の釈迦造り正曆二年三月廿八日河原院にて五時講法行ひる願文の書に佛の飯を志し昔今迄かきぬ心成り切利天三夏ハ欲天人間より四天王まで四方由旬四天王切利天まで四方由旬あり一夏の行成安居と云釈迦三十七の年母摩耶夫人の恩報せんとして一夏九旬の間天に登り法説摩訶摩耶羅是くとあり其時下界人間に佛在るや千閻国王赤梅檀より佛像成摸作んとする時帝釈の臣昆首羯摩とて近の道成究る成下して像成造む是天彼王の志成拜するも下下の句ハ如來滅後二千年かきぬる金成塔拜するも貴くとの意に跋提河唐ハ無勝と云此河の辺に妙羅林あり四雙八株と云四八葉常樂我淨成表

江匡衡



浪洗欲消と欲竹馬を鞭而顧不雨打て破易茶雞を闘しめ而長忘らう

極樂之尊一夜山月正圓先三朝洞花落と欲

王馨の聲、管絃の奏、思衲衣の僧、綺羅の人

浪洗欲消、鞭竹馬而不顧、雨打易破、闘芥鷄而長忘保胤

念極樂之尊、一夜山月正圓、先三朝、洞花落紀應名

之會三朝洞花落

村上天皇康保元年三月十五日保胤入道始て勸學會を行  
る其序へ叡山の碩徳世人勸學院の學生世人僧、法服小  
香が持し堂の正面より東に列り志求佛道者の偈誦  
ト左右より座に着朝々法華經を講じ念佛修す  
文士法華の文の題して詩作り講ず此會狂言綺語の罪  
嗽んる文道先達の學徒に勸三月九日の十五日に修すと  
ぞ上の句ハ十五日の弥勒満月の形容して念佛の意は作り  
下の句ハ唐ハ句曲山あり三月十八日神仙此山の宴會と云  
句曲會と云十五日の彼に先づと三朝と云洞花ハ仙境  
三月中らるる飛花の時観る意又勸學院ハ三条の北  
至生の西にあり藤氏の學生の學問所なり  
王馨聲思管絃奏衲衣僧代綺羅人  
九条右大臣の亭にて法華會を行きたる時の作と云野相公  
志の野相公と時代異るる作者の法書寫の誤らざるを



眼の蓮、豈清涼  
の水に養へや。面  
の月、長十五天  
に留る

眼蓮、豈養清涼水面、月長留十五天

佛の神通、以て  
争、酌盡、僧祇  
劫、經、も朝宗

以佛神通、争酌盡、經僧祇、劫欲朝宗

凍城、叩て肩來寒  
谷の月、霜拂て  
拾盡暮山の雲

叩凍、肩來寒、谷月、拂霜、拾盡暮山雲

海神通、以て汲盡、がごとく云心、智度論、にの太子、龍宮  
の往如意の珠、得く衆生の爲に、宝雨降、さんと、龍王  
儻てかの珠、棄るも、太子大誓願、起、貝城、以て海水、城  
汲、干んと、次諸天、あまき、俱に汲、むと、海水、十に七八、濁る、  
龍王、栖の、見んと、珠、返せ、とあり、十方を、洛、又とす、十  
洛、又、城、度、洛、友、俱、眠、未、陀、阿、度、多、大、阿、度、多、那、由、他、と、次、弟  
一、六十、數、に、至、て、僧、祇、と、云、劫、の、時、と、云、朝、宗、の、百、の、水、海、城、宗、と  
して、朝、宗、の、義、誓、の、海、に、く、時、の、あ、る、と、方、水、城、集、んと、太子、釈、迦  
勸、學、會、に、提、婆、品、の、心、城、作、り、釈、迦、因、位、の、時、慶、保、能  
轉、輪、聖、王、と、して、七、宝、の、富、に、あ、り、深、く、道、心、城、殺、し、  
法、城、求、む、何、私、山、の、我、妙、法、蓮、華、の、大、衆、の、法、城、ま、あ、  
我、小、從、り、説、聞、せ、んと、忽、位、城、太、子、に、あ、り、山、の、山、あ、  
谷、水、城、汲、せ、山、の、葉、城、拾、せ、王、の、心、城、難、行、を、と、結、く  
つ、お、れ、大、衆、の、法、城、得、此、心、城、作、る、谷、水、の、凍、城、を、た、や、と、ま、  
月、の、寒、城、肩、て、來、る、霜、城、打、ち、ひ、雲、の、安、奉、の、葉、城、拾、か、  
雲、城、拾、ひ、尽、す、ら、と、行、基、の、歌、も、



己に終て未千年  
の役習末初て  
遇難一乗の文  
得る

己終未習千年役初得難遇一乗文

上通一章十善の君の位はてて苦勞同  
る役習六法の為す終あも千年の艱難の  
遇難一乗の文は難得なり方便品に十方佛土中  
唯一乗法無二亦無三二一説上の句終身習せと云心  
けせしてやまひのれ終はつて思ひくさるる

君ハ弥陀の来世の接ある身とする此世の  
功成りて功成りて其花は實なる詞の縁なり

新古今  
おはたし三まじりてはも我立に真如も是は教存

桓武帝延曆年中比叡山開基根本中堂建立あり時の  
歌阿耨多羅三藐三菩提の佛は無上正編智覚も

此山我立仙とよみ来たり  
加護も今かく仙とて建立あり天下太平祈願道場

千載  
こらくハたるるたるとはしつとめてはるる

拾遺集  
拾遺集は仙慶法師の歌十五億土と聞つと  
勉む去此不遠なりをるるは遙なり

と君と思ひて茶を法のをめかざらつてはるる  
村上御倉

天曆の御時故后の宮の御賀せまをんをうるに言をい  
らばやぐ其のけして御諷誦行せのひるの御誦なり

拾遺集ハ法のこもふとあり心ハ母后の御賀よ  
まのせんと儲をもひ若菜は思の外今日の法事に摘せる

僧  
持てむと訓す  
業門なり

蒼茫霧雨之晴初寒汀路馬立重疊煙

嵐之斷處晚寺僧歸



寺に僧歸

野寺に僧を言歸  
に月城帶。芳林  
小客城推乃醉て  
花に眠。

堂の母儀有以  
中天の月に於逗  
留するも莫室の  
師跡有以五臺  
之雲に於偃息  
するも莫

明鏡乍開て境に  
隨て照。白雲著不  
山城下て來

空城觀むる淨侶  
心懸月城懸。老僧  
送高僧ハ首に霜  
城刺

鶴閑ふして翅に千  
年の雪城刷。僧老  
て眉ハ八字の霜城

月永國

良詩厚

閑居の賦に霧を雨の蒼茫かゝる晴る虎城の張讀  
寒に汀に鷺の立る寂たる煙嵐の重畳する少した  
断る僧の寺に歸るが  
のうらも晩景のうら

野寺訪僧歸帶月芳林携客醉眠花

野辺にある寺に僧を訪ふ夜小入て歸る月城帶と  
云々芳林の禪林の心か客城伴ひ千城携つ花城か先  
醉がまろ心地眠る此詩ハ醍醐一条寺の僧正の逢歸依れ  
思あつて作る或説ハ鮑溶の作して東郊の遁先處士に贈る云

堂有母儀莫以逗留於中天之月室

有師跡莫以偃息於五臺之雲 保胤

齋然法橋入唐の時餞別詩序堂ハ殿之正寢として父母を  
居るを云云て母堂とも云五天竺の中央を中天竺と云父  
母在るとい遠く遊すと云彼地に云逗留と云  
歸て母のまゝと云五臺ハ房ハ五臺山ハ文殊無師の地

師の跡も荒るといも五臺の法のものも偃息するに  
歸て城急だくと云雲ハ遠く城云心かて月に對し齋然  
渡海の願文に先五臺山に奉り文殊の即身に逢ふ欲  
次ハ中天竺の詣釈尊の遺跡城禮せん欲す云々

明鏡乍開隨境照白雲不著下山來

僧の徳城賛る詩之智慧ハ明鏡の下ハ境至すと云云野相公  
照す僧ハ城雲の侶とも云て山に住む適都に來る城の白雲も著

觀空淨侶心懸月送老高僧首剃霜

源の順南都の般若寺ハ赤らも老僧頭剃て出迎順  
くる當意の作る般若の理ハ有爲空無爲空墨竟空と云  
りゆも空城觀むると寺号城と云浄侶ハ僧ハ諸法空寂  
のゆも城觀むると心の月明なり老僧送る僧の白髮城霜と云

鶴閑翅刷千年雪僧老眉垂八字霜

鶴ハ諸鳥の内に閑るもの此角かて翅城いつらる原爲憲  
雪城刷て眉ハ八字の霜城刷毛に白毛城生むる霜

良詩厚

良詩厚

良詩厚



とんかせん天台智者大師の賛いづみ目めの重瞳じゅうとう現ある眉まゆの八綵はっさい絨じゅう毳まいとあり此詩藤の憲材天台に登詩の和詩と作しる

後撰集ごせんしゅうにえたてて頭かぶのうしろなる時ときのにたたつつけをるもららふ

いとあり黒髪くろかみとあり無乳母むちちの女親にちちくこもとて一のいはかく髪

絨毳じゅうまいせよととの心こゝろに馬うま羽はね王おうの黒くろたたいと枕詠ぎこが母はは親おや

髪かみはらせよととの心に馬羽はね王おうの黒たたいと枕詠ぎこが母はは親おや

能よ断ぎ弃り恩おん入い無む為な真ま實じつ報ほう恩おん者もの

能よ断ぎ弃り恩おん入い無む為な真ま實じつ報ほう恩おん者もの

法はふ華わ經きやう譬へい論ろん品ひんに爲求もと牛ぎゆ車しや出で於お大だい宅たくとあり文ぶんの心にあり長ちやう春しゆん

出いよとども遊あそびにあそびまして出いぢに方かた便べんはり羊やう牝びん車しや

鹿かの車牝びんの車分ぶんど作り是こゝはあるへん乗て出よと云いふもと

もたは逃れして出よとは大白だい牛ぎゆ車しやともあるに宝小せうともある車しや

はあるに安あん穩えんともあるに喻あり其心こゝろは三界さんの安らぬは此火か宅たく

のどく其衆しゆ生じやうは救んと方かた便べんはり華わ嚴げん阿あ舍しゃが等の小乗じゆ

を助んと車くるまあるをもとて此こゝの心は三界さんの安らぬは此火か宅たく

三さん乗じゆの法ありともあるに大だい乘じゆ妙みやく法ぽうの大白だい牛ぎゆ車しやのりをいふもと

三さん界さんの火宅たくは出離しすもともの心にて思おぼひの家いへと云ふもと

宅たくと云ふもとの車くるまは法華はつわ經きやうは云ふもと云ふもと云ふもと云ふもと

二に度たふ汚おごと厭離えんりの心ははよくのこと

二に度たふ汚おごと厭離えんりの心ははよくのこと

二に度たふ汚おごと厭離えんりの心ははよくのこと



良言國史抄

卷之六

新

終

和漢朗詠集抄卷之六終



